

クライマーズハイ

——きつい。つらい。いい加減、このサドルから腰を下ろしたい。

山岳コースを攻めるとき、どんな名クライマーであっても一度はそんな思いが頭をかすめるものだ。

かの伝説的クライマー、マルコ・パンターニですら「どうしてそんなに速く山を走れるのか？」と記者に問われた時には、「一秒でも早くこの苦しさから解放されたいからさ」と答えたのだとかなんとか。

自転車で坂を登るということはそれだけで非常につらい運動なんだ。

それは一介の素人クライマーに過ぎない僕も当然例外ではなくて。というか、ここまでの道のりで、もう百回はそんなことを考えてる。

鉄の塊にしがみ付いて、ひたすら重力に逆らって動かし続けた体はほとんど限界。もう、思うように脚に力が入らない。ハンドルをつかむ腕も同様。ハンドルをまつすぐと維持しきれなくなつて、ふらふらと前輪がふらつき始める。

呼吸も激しく乱れている。大口開けてむさぼるように空気を肺に何度も送り込むけれども、苦しさは一向に解消されない。逆に呼吸のたびに胸の底にどす黒い灰が堆積していくような感覚が付き纏う。きつと、身体のパフォーマンスに肺が追いつかないんだ。

手首に付けている腕時計型の心拍計のモニターを一瞥。胸に取り付けたトランスミッターバンドから電波で送られたデータがそこに表示される。心拍数はそのまま運動強度を表す指数になる。ちなみに、僕の現在の心拍数は一八〇後半。最大心拍数の約九十パーセント。過負荷もいとところだ。

そこに、さらに追い打ちをかけるように、夏の暑さがのしかかってくる。肌に突き刺さるような鋭い日差しと、ねっとりとした体にとわりつくような暑く湿った空気は、僕の体力と気力をごっそりと削っていく。

巡航速度が四〇キロにもなる平地巡航とは違い、登坂はヒルクライムその半分以下のスピードしか出ない。当然、向かい風もあまり発生しない。平地なら風が吹き飛ばしてくれる汗もこれじや十分に発散しなくて、薄いサイクルジャージの生地を濡らすだけ。それが薄い膜みたいが無駄に肌に張り付いてきて気持ち悪い。

なにもこんな苦しいこと、やる必要性なんてどこにもありはしないのに。本当に僕はなにをやっているのだろう。時々思う。

ぶっちゃけた話、ハンドルを切って回れ右をすれば、あとはペダルを回す必要もなく、ふもとまであつという間にたどり着ける。ここまで二十分以上、もがきながら登り続けた道がその半分以下の時間で無かった事になる。それだけのこと。苦しい思いをして登り詰めた成果は、あっさりと消え去ってしまう。僕がやっていることなんて、そんな程度のこと。苦勞の割には得られるものがあまりにも少なすぎる。

でも、僕はそれをしない。両脚は一定のペーシングを維持するように回転運動を続け、両腕はしっかりとハンドルをホールド。足の力が逃げないように、身体を車体に固定し続ける。意地になって、死んでも引き返すもんかって。

ふと、僕の右側に一台の原付が並ぶ。間の抜けたエンジン音にまぎれて、「ペース落ちてるぞー」って、聞きなれた声。

「ゴールすぐそこ。もっと気張れ！」

苦しい息の中、目だけを動かしてそちらを見やる。原付に乗っているのは、全身程よく褐色に焼けた、茶髪の男の人。というか、僕の兄ちゃん。いつもは一人で山に登っているけれども、今日は兄ちゃんが付き合ってくれている。スタート地点からこうして後ろから僕のフォームを確認やペースの配分を指示してくれているんだ。そういう練習は一人ではできない。特に、僕みたいにチームに参加せずに一人で走っている自転車乗りにとっては、こういう練習は貴重だ。他に見てくれる人はいないし。兄ちゃんにも都合があるから、たまにしか付き合ってくれない。

「ほら、ラストスパート」

指示に従い、僕は右のシフターをツークリック。

かちやりと、速やかにギアが切り替わる。

急に重くなるペダル。

「——くッ！」

歯を食いしばながら、僕は手のポジションを下ハンへ移動させ、めいっばい握り締める。

そのままサドルから腰を上げて——ダンシング。

両腕でハンドルを自分の体に引き付けるようにしつつ、全体重でもってペダルを踏み込む。その際、踏み込んだペダルとは逆の方向へ、車体をやや傾ける。全身のバネと体重を動員したひと踏みに、車体が一気に加速する。

それを何度も繰り返す。

ぐん、ぐん、ぐん、と、リズムよく。

「……が、はッ！」

いつの間にか止めていた息を吐き出し、再び空気を肺へかきこむ。

ただでさえ疲労困憊した身体に、この高負荷な無呼吸運動。

もう、ただ、ひたすらに、しんどい。

心臓が、胸から飛び出すくらいに強く脈打つ。

トントントんと、わけのわからないくらい速いペースで、脈動は耳鳴りのように頭の中に響く。

そんな余裕はないけど、たぶん今心拍計を見たらとつくに最大心拍数を振り切っているかもしれない。

それでも、ペダルを踏む足とハンドルを握る手の力は抜かない。

やがて、ゴール地点が見えてくる。

そこで、さらにひとつシフトアップ。
脚に力をこめ、さらに加速して――
でも、そこで終わりだった。

「ぐッ……」
売り切れ。

ぼろぼろになった脚が負荷に耐えかねて、いよいよ反抗し始めたんだ。
もう、思うようにペダルを踏み込めない。
まるで鉛の塊みたい。重い。

力が入らない。
スピードが落ちていく。
だめ。

これ以上ダンシングを維持できない――

「スピード落ちてんぞ！ もっと上体起こして踏み込め！」

――うっせー！ そんな余裕あるもんか！

そんな文句すら、吐き出すことが出来なかった。

結局、僕はゴールを目前に乗車姿勢をシッティングに戻さざるを得なくなり、大幅にペ
ースを落としたままゴール地点を通過することになった。

最後の方は、ふらふらと情けないスピードしか出せない始末。

このスタミナ不足が僕の最大の弱点か……。

「はあ、はあ……げほッ、げほッ」

せき込みながら、ステムに取り付けてあるサイクルコンピュータに目をやり、タイムを
確認。お、自己記録更新。だけど目標には届かず、か。

脚を止め、ハンドルにもたれかかるように、うなだれる。

そのまま道の先にある頂上展望所の駐車場へゆっくりと侵入。

ブレーキを軽くかけて減速させながら、適当な場所で右足首をひねり、ペダルとシュー
ズを分離した。

ビンディングペダルといって、シューズとペダルを固定するシステムだ。ペダルを回す
際に、踏む力だけではなく引く力を利用することができるから、より効率的なペダリング
が可能になる。ロード乗りの必須品。

右脚を後ろに回し、着地。それと同時に左足もペダルから分離させ、自転車から降りる。

「……しんどっ」

そのまま、自転車を放り出すようにして、アスファルトの上に大の字に寝転んだ。

空から降り注ぐ日差し、背中から伝わるアスファルトの熱、ついでに身体から発生する
体温のトリプル攻撃に、思わずめまいを起こしそうになる。

でも、もう体はほとんど動かない。暑さなんかより疲れの方が深刻だ。

そのままの体勢で、乱れきった息を整える。

自転車に乗った後は、もう何も考えられなくなる。そのくらい、消耗する。たぶん、これほどエネルギーを消費するスポーツはそうそうないんじゃないかな。

こんなヒルクライムならまだしも、百キロ以上を走るロードレースじゃその消耗はフルマラソンの比じゃない。競技中、自転車に乗ったまま食事をとることは当たり前。こまめにエネルギー補給していないと、ハンガーノックで立つのもままならなくなってしまふ。

僕も前に一度だけハンガーノックになったことがある。補給食を持たずにロングライドを敢行した結果だった。空腹を感じた時点ですでに手遅れ。そのあとはだんだん体に力が入らなくなつて、しまいには道端に座り込む羽目になってしまった。完全なガス欠。気合いでどうにかなる問題じゃないんだ。本当に、体が動かない。ガソリンが底をついたんだから当然、エンジンは動かない。偶然、近くを通りかかった車に飴玉をめぐんでもらつてその場は何とか切り抜けたけど、アレは本気で死ぬかと思つた。

まあ、今僕が倒れているのは別にエネルギー切れを起こしたわけじゃなく、単なる疲労。休めば治る。

「何寝てんだよ、だらしねーな」

原付から降りた兄ちゃんが、視界の端から覗き込むようにして言った。

ぶかぶかのTシャツに短パン、そしてサンダルというラフな出で立ち。少し太り気味な体型だけれども、兄ちゃんも何年前か前まではそれなりに活躍したロードレースの選手で、市立高校の自転車競技部では副部長を務めたほど。インターハイも経験している。本番では散々だったらしいけど。

今ではレースからはすっかり手を引いて、大学生活を満喫している。大学ではサイクリング部に所属しているけど、あくまで「サイクリング」。「ロードレース」はしなくて、休日を利用してその辺を走り回ったり、たまに遠方へ自転車旅行に出かけたりするくらい。そっちの方の楽しみに目覚めちゃったみたいだ。

ちなみに、平日はだいたいサイクリング部の部室でテレビゲームしたり、漫画読んだり、麻雀したり、近所の河原で野球したりしているらしい。あれ、サイクリング部って何する部活だっけ？

運動量が激減した割には現役時代並みに食うから、体型も今ではすっかり丸くなってしまった。とはいっても、現役時代に蓄えた自転車競技に関する知識は今でもしっかりと生きているから、休日にはこうして練習に付き合ってもらっている。

「……ポトル」

「ん？」

「ポトル、取って」

「そんなら自分で取れよ」

「……動けん」

すぐ横で倒れている自転車にスポーツドリンクの入ったボトルは備えていたけれども、本当に動けないのだから仕方ない。

「ったく。しゃーねーな……。ほい、おつかれさん」

兄ちゃんは文句を言いながらもそれを僕に渡ししてくれた。

僕は寝転がったまま、ボトルに口をつける。ボトルをぎゅっと握り締め、絞り出すように口の中にドリンクを流し込んでいく。

平時ならくどく感じるスポーツドリンクの甘酸っぱさが、異常においしく感じる。ぬるくなっただけはいたけれども、液体がのどを通過するときの感覚は、少しだけ僕の疲れを洗い流してくれた。

「タイムはどうだった？」

兄ちゃんが尋ねる。

「三〇分と六秒」

「へえ、いいタイム出してんじゃん」

僕の住む熊本市の西方には金峰山という、標高六五〇メートル程度の山がある。頂上の展望所まで道路もきれいに整備されている上、麓からの距離が約十キロ、平均斜度が六パーセント程度と、ほどよいコース。だから、地元の自転車乗りにはわりかし人気の高い山。

ちなみに、このコースにおける僕の最高タイムは三〇分八秒だった。今回はそれを二秒も更新したわけだから、悪くはない。

「目標には届かなかったけどね」

僕の目標は、三〇分の壁を超えることだ。そのためにはこの十キロの道のりを平均二十キロで登る必要があるのだけど、山で二十キロ超を維持するのは簡単なことじゃない。最初は調子よく登っていても、いつも途中で失速してしまう。今回は六秒足りなかった。たった数秒の壁が、あまりに厚い。

「目標も何も、これだけ速く走れたら十分だろ。俺が現役んときの記録より三分以上も速い」

「兄ちゃんはスプリンターだったんでしょ？ 比較になんないよ」

「俺だって高校時代は練習で何度もこの山登ってたんだ。脚質がどうであれ、それを自転車始めて一年足らずのお前に抜かれちゃ立場ねえって」

苦笑いしながら言う。

自転車乗りにはそれぞれに脚質というのがある。平地でのスプリントに特化したスプリンター、登坂に特化したクライマー、平地と登坂いずれにおいても平均以上の実力を発揮するオールラウンダー。だいたいこの三つに分けられるけど、他にも得意とする分野の違いからルーラーやパンチャーなんて細かい分類があるみたい。あいにく僕にはその辺の違いがよくわからないので説明は割愛。

で、僕の脚質はその中ではクライマーに属する。身軽な体躯を活かして、重力に逆らい続けなきゃならない登坂において最も力を発揮するタイプ。反面、平地での巡航やスプリ

ントじゃあまりスピードが出せない。登坂と平地じゃ使う筋肉が全然違うし、そもそも体重が軽いつてことはその分筋肉が少ない、つまりパワーに劣るってこと。瞬発力の求められる場面とか、常に大きな空気抵抗と戦わなきゃならない平地じゃ僕は全然。全力で漕いでようやく時速五十キロちょいしか出ない。ちなみに、トッププロはゴール前スプリントで七十キロを軽く超えるんだとか。ここまでくると化け物だ。

僕はようやく上半身を地面から起こした。肩が妙に重い。背中が突っ張ったように痛い。自転車は思った以上に上半身の筋肉を酷使しているものなんだと、改めて実感する。

「ところで、兄ちゃんから見て今日の僕の走りはどうだった？」

僕の問いかけに、兄ちゃんは少し考える。

「んーそうだな……。いい走りはしてたと思うけどな。ま、あえて言うならペダリングかな？ お前さ、トルク重視のペダリングになってるんだよな。こう、ぐいぐいつて感じ？」

手でペダルを踏み込む動作を真似しながら、兄ちゃんは説明する。

「確かにこの方が出力は出るし加速するときにはいいんだけど、これだと脚に負担が大きいかからすぐに脚が売り切れる。たぶん後半からの減速は、スタミナ不足もあるけど、これが原因だな。もっと、くるくるってケイデンス重視のペダリングをした方がいい」

「それは自分でも意識してるんだけどね」

身についてしまった癖はなかなか抜けきらない。序盤はくるくる回していても、中盤辺りにさしかかるころには自分でも気づかないうちにぐいぐい踏むようなペダリングになってしまっている。疲れてくるとペダリングへの意識が薄れて、余計に疲れるペダリングになってしまふという、悪循環。

「あー、それともうひとつ」

思い出したように、兄ちゃんが付け加えて言う。

「これもペダリングなんだけど、お前ペダル踏み込むときさ、なんか右脚重視で踏み込んでいる気がするんだよな」

「右脚？」

「たぶんお前の利き脚は右なんだろうけど、その利き脚に頼りすぎてるんだよ。加速するときとか、あと斜度が急になったときも、右脚でぐいぐい勢いつけて踏んで、左足はついていくだけって感じ。疲れて減速したときなんか、顕著に出てだぞ」

右脚中心で踏んでる？ 意識したことがなかった。

「フォームの乱れは早めに修正した方がいい。運動効率悪いし、無駄に体力消耗するし、下手すると左右の筋肉のバランスが崩れて身体を壊しやすくなる」

「フォーム……ね。考えたことなかったなあ」

「こればっかりはな。誰かに見てもらわないと分からないし」

どんなスポーツにせよ、一人でトレーニングできることには限りがある。僕の高校には自転車部はないし、どこかのクラブチームに所属しているわけでもないから、基本的に一人で走っている。でも、これからさらに上を目指すなら、チームに入るのも一つの手の

かもしれない。

……僕がチームに？

うーん。なんだかいまいちピンとこない。

アマチュアのクラブチームは、それこそ市内にいくつもある。だいたい個人経営のサイクルショップで常連が集まってチームを結成することが多いらしい。でも、僕には行きつけのショップというのがない。消耗品や部品なんかはインターネットや近くの大型自転車店で買うし、僕の愛車はそもそも兄ちゃんから買い取ったもの。だから、自転車を始めた時点からショップとの接点は一切なかった。

どうすればチームに入れるんだろう。今さら何の関わりもなかったショップに行つて、チームに入りたいって言うのはなんだか気が引ける。兄ちゃんなら何かしらのコネも持っているかもしれないけど……それ経由で紹介してもらう？ それもなんかなあ……。今更気恥ずかしいのかなんというか。

「今度の大会……大観峰ヒルクライムだったか。いつだっけ？」

兄ちゃんが聞く。

「再来週の日曜」

「うーん、残り二週間か。微妙だな。それまでに修正できればいいけど……」

そこで、兄ちゃんはふと思いついたように腕時計を見やった。

「おっともうこんな時間か……。よし、休憩終了。そろそろ行こう」

兄ちゃんはこの後になにか予定があるみたいだ。せかすように僕に言った。

「このまま玉名方面に下つて、太郎迫たろうさきに回ろう。で、そのまま裏金峰コース」

「げ、裏金峰」

金峰山はいくつもの山が寄せ集まってできたような地形になつて。一ノ岳、熊ノ山、荒尾山、小萩山……これらの山々をすべてひつくるめての金峰山だ。当然峠道もたくさんあって、裏金峰っていうコースもその一つ。登る距離は五キロくらい。序盤から傾斜が急になつているけど、そこさえ乗り切れれば、距離も短いし、さほど厳しいコースと言うわけでもない。だけど、ここからその峠口にたどり着くまでにアップダウンの多い三十キロもの道のりを走り抜けなきゃならない。頂上まで全力の登坂をしたあと、そのコースを走り、さらに裏金峰を登るとなると、さすがに……。

そんな僕の思いをよそに、兄ちゃんはエンジンをかける。ヘルメットを頭に寄せ、あご紐の連結部分をつなげる。

「どうした？ さっさと行くぞ。昼までには帰らないと。俺だつて暇じゃないんだ」

ぶーん、ぶーん、とエンジンをふかす。

「……はいはい」

こちらから練習見てもらうのを頼んだ以上、何も言い返せない。それに、自分で追い込めないところまで練習するために付き合ってもらっているようなものだし。

腰に手を回して、サイクルジャージの後ろポケットから補給食の入った袋を取り出す。消化・吸収しやすい水あめ状のタイプのものだ。袋を口で破って、絞り込むようにして中身を口の中に送り込む。甘ったるくて、けっこう酸っぱい。口の中にまとわりつく感覚は、何度経験しても慣れない。スポーツドリンクでそれを胃へと流し込み、エネルギー補給完了。

軽く屈伸と伸脚をして、強張った筋肉を軽くほぐす。地面に横たわる愛車を引き起こす。さて、行くか。

さっさと行ってしまった兄ちゃんを追って、僕は山を下り始めた。

下りであれば、原付に追いつくのも簡単だ。小回りの利く自転車は、車やバイクじゃ曲がり切れないほどの高いスピードのまま、カーブをこなすことができる。

兄ちゃんの原付はすぐに捕まえることができた。そのまま追い抜いていく。

頂上から下っていくと、やがて県道一号線に合流した。それを、市内から見て北西、玉名方面へと走る。金峰オレンジ街道ともよばれる、ゆるやかなアップダウンの続くワイディングロード。しばらく森の中を進むと、やがて山の斜面一面、視界いっぱい広がるみかん畑が現れた。斜面にはまるで階段みたいにくつも段差が作られていて、そこにたくさんのみかんの木が植えられている。さすがにこの時期はまだ実は小さくて色も青いままだけれども、深呼吸をすればその空気の中にうっすらと甘酸っぱい香りが漂っているのが感じられた。

さらに進むと、今度はみかん畑の向こうにきれいな青色をした有明海が。太陽の光を受けてきらきら光る水面。それをかき消すように、フェリーが海を横切る。今日は天気が良いから、海の向こうの島原、普賢岳の姿も見ることが出来る。

町の中にいたんじゃ、絶対に見ることのできない風景。自転車で山を乗り越えてこの景色を見たと、僕はどこか解放的な気分になる。僕の中の世界が広がっていくような感覚を覚える。

「ほらほら。なにぼうつとしてんだよ。ペースあげていくぞ」

と兄ちゃん。

やれやれ。もっと景色を楽しみたいところだったけれども、トレーニング中だからそういうわけにもいかないか。

兄ちゃんの指示するペースに合わせてると、もう、周りの景色に気を配っている暇なんか無い。必死にもがいているうちにあつという間にオレンジ街道は抜けてしまい、特に見どころのない玉名広域農道に突入。そのまま、裏金峰へと向かった。

インターバル」きつかけ

今でこそ自転車で山とか登っているけれども、僕は運動がそれほど得意な方ではなかった。体格が小さくて力はないし、足も遅い。小さいころにスイミングスクールに通っていたから、水泳だけは得意だったけれども、それ以外はテンでダメ。

それに加えて、僕は不器用で頭の回転も遅い人間。スポーツ、特に球技をする時なんかはそれが顕著に出ている。ボール行方を目で追い、同時に自分や味方、敵の位置を正確に把握。そこから次に自分が何をすべきかを瞬時に判断し、素早く行動に移す——こういったいくつもの情報を頭の中で速やかにかつ効率よく処理し、行動するということがどうにも苦手だったんだ。

だからといって、スポーツが嫌いというわけじゃない。小さなころは野球が好きで、一応、小・中では一貫して野球部に入っていたくらい。

でも、試合に出してもらっても走れない、打てない、守れない、の三拍子が揃った僕が活躍できるわけもなければなく。チームに迷惑をかけてばっかだったから、基本的には補助役に回っていた。ボール拾いしたり、ティーバッティングの練習に付き合ったり、練習や試合中に飲むお茶の準備とか、スコアブックをつけたり……ほとんどマネージャーみたいななもんだ。それはそれで楽しくはあったけれども。

高校に入学してからは特に部活に入るようなことはしなくて、放課後は友達と街へ行って遊んだり、河原でキャッチボールしたり。友達と都合が合わないときには行きつけの喫茶店に行つてのんびり過ごしたり、図書館で本を読んで時間つぶしたり。だから。

スポーツとはほとんど縁がない生活を送っていた。自転車も、せいぜい通学用ママチャリで家と学校の間を往復するくらい。

そんな僕が初めてロードバイクに触れたのは去年。高校一年の秋。相変わらず何の変哲もない平坦な日々を送っていた九月の終わりごろのことだった。

全ての元凶は、四歳年上の兄ちゃんの一言だ。

「お前、俺のロード買わね？」

「……はあ？」

最初は何を言っているのかわからなかった。

兄ちゃんは高校時代、バリバリのロードレースの競技者だったわけだけど、兄ちゃんのいう「俺のロード」ってのはそのころからずっと使っている自転車のことだ。もともと近所の自転車屋の倉庫奥深くに眠っていたぼろぼろの骨董品を安く買い叩いて、自分の手で四苦八苦しながらレストアしたもの。それからは毎日のようにサドルにまたがって、宮沢健二じゃないけど雨の日も風の日も、夏の暑さも冬の寒さにも負けずトレーニングに励んできた。苦楽を共に乗り越えてきた愛機。そういうわけで、思い入れもひとしお。とても大

事にしていた。

そんな大切なロードを僕に売る？ 自転車に何の興味も持たない僕に？

たしかに、兄ちゃんのロードバイクの使用頻度は極端に落ち込んでいた。インターハイを最後に競技からは引退したし、大学でサイクリング部に入部してからはランドナーという旅行用の自転車を新しく買ってそちらをメインによく乗り回していたから。

ランドナーとロードバイクは、外見はけっこう似ているけど、その設計理念が大きく異なっている。僕も詳しいことはわからないけれど、兄ちゃん曰く「ロードバイクはひたすらにスピードを追求したのに対して、ランドナーってのは長距離をいかに楽に走れるかを追求して作られた自転車」なんだそう。そういう自転車だから普段乗りにも使いやすいのか、大学に行くときはいつもランドナーを使っていた。

でも、まったくロードを使わなくなったわけじゃない。ポタリングの時とかサイクリングイベントに参加する時にはよく使っているし、たまに通学に使うこともある。整備もランドナー以上に欠かさずやっていて、相変わらず大切にしているようだった。

だから、ロードを売るなんて信じられなかったんだ。なにかよっぽどのことでもあったのかと思わず身構えちゃったけど、答えは思ったよりもずっと単純だった。

「新しいロード買うんだよ」

これはこれでまた意味が分からなかった。ロードバイクならもう持っているじゃないか。わざわざ高い金出して新しく買う必要なんてどこにもないように思えるのだけ。

「壊れたの？」

そもそもが中古品。部品は新しいのに交換してあるけれども、フレームは何年も前のものだって聞いていた。だから、もしかしたらフレームがいよいよダメになっちゃったのかと。

「んなわけなだろ。俺がそんなものお前に売ると思うか？」

「たしかに。じゃ、どうして？」

「これ、買うんだよ」

兄ちゃんを取り出したのは、とある自転車ブランドのカタログだった。それをペラペラとめくって、一台の自転車を僕に見せつけた。ドロップハンドルの自転車。白と黒にペイントされたフレームに、赤字で大きくブランド名がデザインされていた。でも、何よりも目を引いたのはその下に書いてある金額。税込二十八万円なり。

「フルカーボンだぜ、フルカーボン。しかも、コンポーネントは^{アルテグラ}ULTEGRA。デザインも俺好みだし。ホイールは……まあ、アレだけど、それは後から交換すればいいし。これで二十八万は買いだろ」

なんだか得意げ。残念だけど、言っていることの半分以上はあまり理解できなかった。ふるかーぼん？ こんぼーねんと？ あるてぐら？

あ、七五調だ。

「あのロードにも長いこと乗ってるしな。そろそろフルカーボンに乗り替えたいと思って。

ただ、ちよつと金が足りなくてな……」

「それで、その資金を集めるために僕に古い方を売ろうって？」

「さすが、話が分かる」

「たかがチャリに二十八万？」

もちろん、その手のスポーツ車が高いのは重々承知していた。でも、レースに出るならまだしも、月に数回のサイクリングのためだけにわざわざ新しいのを買う必要がどこにあるのか。買うにしても、もつと安い値段帯で同じような自転車はいくらでもあるだろうに。

「で、おいくら？」

「おお、買う気になったか」

「別に。一応聞くだけ聞こうかと思って」

「そうだな。五万でどうだ？」

「あ、思ったより安いね」

客観的に見ても良心的な値段だとは思った。流行りのクロスバイクを新しく買うよりもずつと安いし、けっこう性能のいいママチャリとほぼ同じ値段帯。中古とはいえ、こんなに安くスポーツ車が入る機会はない。実際に兄ちゃんはこの自転車に乗って活躍していたし、レースにも十分使えるだけの性能はあると思う。

そして、五万くらいなら出せないこともなかった。小学生の時からのお年玉貯金もあるし、普段からお小遣いの一部を貯金する習慣を持っている僕には十分余裕のある金額だった。うん、悪くない話だ。

「でも、いらないや」

自転車は高校に入学してから使っていたママチャリで十分だし、そもそも僕はサイクリングとかレースとか……とにかくそういうのには興味があまりなかった。たしかにカッコいいとは思いつ、ちよつとは乗ってみたいような気もするけれども、学校との行き来くらいにしか自転車を使わない僕にとってはオーバースペックもいいところ。どうせ買ってもすぐに車庫で埃を被るのが目に見えていた。そんな無駄な買い物するほど、僕は馬鹿じゃない。

「いやいや、何もレースに使ってんじゃねえよ。タイヤを少し太いのに変えれば普段乗りでも使えなくもないし、たまにその辺ふらふら回ってみるだけでも楽しいって。一度乗ってみるよ。絶対気に入るから」

「やめとくよ。なんか乗りにくそうだし。こけるかも」

「大丈夫、大丈夫。すぐに慣れる。逆にこっちに慣れるとママチャリの方が乗りにくく感じるくらいだから」

「そういう自転車ってこまめに整備しないとイケないんでしょ？ 整備方法とかわからんわいし」

「整備は俺が教えてやるよ。やっているうちにすぐに覚えるから」
「適当にあしらうつもりが、予想以上の猛攻。ここまでゴリ押しされると、逆に買う気も

失せてくる。もともと買う気なんてなかったけれども。

「僕なんかよりサイク部の人に売れば？ 欲しがる人くらいいるでしょうよ」

「連中、自転車の扱いとか整備とか結構テキトーだからな。なんてったって思い入れのあるロードだし。家族のお前になら安心して売れると思ってるな」

大切なロードを譲れるほど信頼されているのは弟としては素直に嬉しいことだけでも。ようするに……

↓ てっとり早くお金がほしい

↓ 今のロードを売るしかない

↓ でも、大切なロードを手放すのは気が引ける

↓ どうせ売るなら、自分の目の届く範囲がいい

↓ そうだ、家族に売りつけるよう！

……という構図なのかな。なんか、せこい。

家族の中でも、父さんはバイクが趣味だから自転車には絶対興味示さないだろうし、母さんは論外。そもそもあの人自転車乗れんのかな？

で、僕しかないわけか。

「ごめんけど、やっぱりいらんないよ。興味わかないし。正直なところ、僕には自転車に乗るのが楽しいってのがよくわかんないんだよね」

同じ道走るなら、自転車を漕ぐよりバイクで走った方がずっと楽だし、ずっと速いし、ずっと気持ちいいはずだ。誰だってそう思う。どうしてわざわざ疲れなきゃいけないんだろう。

「でも、自転車には自転車なりの楽しさというのがあってだな」

「楽しさ、ねえ……」

「うーん、こればっかはちょっと口じゃ説明しきれないな。実際に乗ってみたいと」

兄ちゃんはしばらく考えて、また口を開く。

「そうだ、お前今度の土曜暇か？」

いきなりの話題転換。

「暇っちゃ暇だけど、どうして？」

なんとなくわかるけど、とりあえず聞いてみる。

「ちよっとその辺をサイクリングしてみないか？ 坪井川沿いとか、この時期走ると結構気持ちいいぞ。ロード貸してやるからさ。どうだ？」

やっぱり。

「だから、買わないってさっきから……」

「いいから一度乗ってみろって。そんな頭ごなしに断るんじゃないで、せめて一度だけでも乗ってみろよ。結論を出すのはそれからでも遅くないだろ？ ただの試し乗り。それで

だめならあきらめてやるさ」

「うーん……」

「な？ な？」

しつこいなあ。

でも、確かに兄ちゃんの言うことにも一理あった。何も知らずに否定するのは、ただの食わず嫌い。むこうも納得がいかないだろう。このまましつこく言い寄られるよりは、いっそのこと一口味わってから改めて断った方があきらめてくれるかもしれない。

「仕方ないなあ……。わかった。今度の土曜ね」

そんな浅い考えから、僕は兄ちゃんの提案に乗ることにした。

それが、最大の計算違いだった。

今思えば、この時点で兄ちゃんの思惑通りに事が運んでいたんだ。

この兄にしてこの弟ありともいうべきか。同じような環境で生まれ育っただけに、もとも嗜好が近かったのかもしれない。

言わずもがなだろうけれども、僕はこのサイクリングをきっかけに、自転車にのめりこんでいくことになった。

二 レース当日

二週間なんて時間はあっという間に過ぎていく。

八月初旬。ついに大観峰ヒルクライム大会の日がやってきた。

当日の天気は見事なまでの快晴。太陽は容赦なく日光を振り撒いている。日差しは浴びているだけで体力を消耗するから少しくらい曇っている方が走りやすいのだけど、天気は文句を言っても仕方がない。みんな同じ条件なのだし。

朝の七時ごろ、僕は兄ちゃんの運転する車でスタート会場である大津の運動公園についた。会場は家から三〇キロ程度。自転車でのんびり走っても一時間半もかからずつく距離。自走で来れない場所ではないけれども、大津は市内よりも標高の高い土地だ。行きは長々微妙な登りが続くから思っている以上に疲れる。レース前から無駄に体力を消耗するわけにもいかないし、ここは甘えることにした。

会場に到着すると僕はすぐに大会本部のところへ行き、受付を済ませた。参加申し込みをした時に送られてきた選手登録番号の紙を係りの人に見せ、黄色い袋をもらおう。袋の中に入っていたのは、大会の参加賞であるタオルと、今大会の概要、スタートリスト、大会

スポンサーのファストフード店の割引券。そして番号の書かれたカードが二枚と計測チップだ。カードには「A-53」と番号が打つてある。これが、僕の選手番号。カードの四隅には針金みたいなのが付いていて、これを自転車のわかりやすいところに付ける。要するにゼッケンみたいなものだ。計測チップは自転車のフォークの部分に取り付けることになっている。途中の計測ポイントやゴール地点にはセンサーが敷いてあって、そこを通過した時のタイムや順位が記録される仕組み。前に出た大会でも似たようなシステムを採用していた。

車のところに戻ると兄ちゃんの姿はなかった。トイレにでも行っているのか。少しだけ気にはなつたけれども、そんなことに気を取られても仕方ない。僕はお車から自転車を取り出して、そそくさと準備を始めた。

選手番号のカードをサドル下のスペースと、ハンドル前のワイヤー部分にそれぞれにつけ、計測チップをフォークにしつかりと取り付ける。

それから自転車の点検をした。チェーンの油は十分か、タイヤの空気圧は適正か、表面に傷や異物がないか、ブレーキが片効きしていないか、ワイヤーのテンションは正常か、変速系に問題が発生していないか。昨日のうちに整備はきちんとしておいたけれども、念のためにだ。レース中に機材トラブルは勘弁願いたい。

一通りの作業を終え、時計を見ると時刻は七時四十分。開会式までの二十分を、僕はウォーミングアップに充てることにした。

ストレッチをして筋肉をしつかりと伸ばしたあと、兄ちゃんの車からローラー台を引きずり出して、自転車の後輪部分を固定。サドルにまたがってペダルを回す。負荷は低めに設定。しばらくは心拍数六十パーセントくらいを維持。息が苦しくならない程度の運動で筋肉を温めていく。ある程度体が温まってきたら、そこから少しずつケイデンスを上げていき、心拍数を上昇させていく。体が温まるにつれ、筋肉の動きがさらに洗練されていく感覚。脚の回転がどんどんスムーズになっていく。

うん、いい感触。今日は調子がいい。

「もうローラー台回してんのか。気合入ってんな」

ふいに兄ちゃんに声をかけられた。僕はペダルに込めた力を少し緩めて、声のした方を見る。すぐそこで、兄ちゃんは腕を組みながらローラー台を回す僕を見ていた。その手にはなぜか白いビニル袋。口の部分から何か黄色い物体が見え隠れしている。

「あれ、兄ちゃん。どこ行つたの？ 車のカギも開けっ放しにして」

「あー、すまん。ちょっと知り合いのところに行つてな」

兄ちゃんも自転車レース経験者。これだけ大きな市民レースともなると、知り合いの一人や二人くらいはいてもおかしくはないか。

「ふーん。で、その手に持つてるの何？」

「ん？ ああ、これね」

ぶら下げているビニル袋に手を突っ込み、兄ちゃんはバナナの塊を取り出した。

「バナナ？」

「そっ。知り合いからもらったんだよ。チームでまとめ買いたら余っちゃったんだとき。どうだ？ 走る前に一本」

「うーん、それじゃあ一本もらっとこうかな」

僕とは面識のない人からの贈り物だけど、ありがたくもらうことにした。これからレースに出るんだ。少しでもエネルギーは蓄えておいた方がいい。

僕はバナナを受け取ると、手放し状態でペダルを回しながら、皮をむいて一口。

「うん、おいしい」

そのまま一気に残りを口の中に詰め込む。

「で、どうだ調子は？」

急に兄ちゃんがそんなことを聞いてきた。僕は急いでバナナを飲み込んで、水でそれを胃に流し込む。

「うん、いい感じ。これなら優勝も狙えるかもってくらい」

「お、優勝狙いか。大した自信だな」

兄ちゃんは冷やかすように言う。

「たとえばよ、たとえ。別にそこまで自信があるわけじゃないし」

「お前なら結構いいところまで行けると思うんだけどな。優勝は無理でも、クラス別でベスト三には入れるんじゃないか？」

「まあ、一応全力は尽くすけど」

僕が自転車レースに参加するのはこれが三回目だけど、「勝ち」を意識して出場するのは今回が初めてだ。

自転車をはじめ最初の頃はただのサイクリングばかりしていた僕。それが、レースにも興味を持つようになったのは今年の春先のことだ。自転車に慣れて、だんだん体力がついてきたころ、自分がほかの人と比べてどのくらい走れるのか知りたくなってきたんだ。

そこで、兄ちゃんにどんな大会があるか聞いてみて、試しに二つだけ参加してみた。

一つ目はオートポリスってサーキット場で四月に行われた三時間耐久レース。二つ目は、雲仙で行われた今回と同じようなヒルクライムレース。でも、両方とも勝負に行くつもりなんてなかった。本当に、試しに出ただけで。まあ、出たら出たで本気で走ってしまう僕だったけど。そのころは今みたいな厳しいトレーニングをしていただけではなかったから、もちろん順位はそれほどよくはなかった。オートポリスじゃ四〇〇人中一二〇位だったし、雲仙ヒルクライムでは得意の登坂だったけど、十代の部門では五十人中で十一位、総合順位で三〇〇人中の中で四十二位という結果に終わってる。

でも、今回は違う。きちんとこの大会に焦点を絞って、ひたすらトレーニングを続け、そのうえでレースに臨む。

前に比べたら金峰山のタイムだってずいぶん伸びた。少なくとも、自分と同年代の中では実力はけっこう上の方にあるんじゃないかと自負している。

この大会は僕が一人の競技者として初めて出場する大会と言ってもいいかもしれない。

「ま、せいぜい頑張れや。もし表彰台上がれたら帰りに焼肉おごってやる」

「へえ。いいこと聞いた。そりゃ死ぬ気で表彰台取りに行くしかないね」

僕は足を止めて、ふうとため息。首からかけていたタオルで汗を拭いた。ボトルを口につけて水分補給。かなり体も温まってきたし、そろそろ開会式が始まる時間。アップはこの辺で終わらせておこう。

『間もなく開会式を行います。参加者の方は本部前に集合してください。繰り返します。間もなく開会式を——』

ローラー台から自転車を取り外しているとき、そんなアナウンスが流れてきた。

いよいよか。

自転車を兄ちゃんの車に立てかけて、僕は開会式会場に向かう。

「それじゃ、行ってくる。自転車見といてね」

「おう」

インターバルⅡ 初めての

初めてロードバイクというものに乗った時の感覚は、今でも覚えている。

兄ちゃんが貸してくれたのは、青緑色にカラーリングされたきれいな自転車だった。使い古されて、塗装のところどころに傷が入っていたけれども、手入れだけはキチンとされているから、汚れも錆もほとんどない。

フレームのダウンチューブには「Branchi」というブランド名が刻まれていた。自転車に興味がなくても、そのブランド名だけは知っていた。ビアンキ。たしか、最古の自転車メーカーだったか。街中でもこのメーカーの自転車はよく見かける。

「きれいだろ。チェレステっていうんだよ、この色。ビアンキのファクトリーカラーなんだ。で、フレームはクロムモリブデン鋼っていう……まあ、ようするに鉄の合金で出来てる。今はカーボンが主流だし、古いタイプのロードにはなるけど、コンポーネントは新しいのに入れ替えてあるから操作方法は今のロードと同じだ。ほら、このブレーキレバーの内側にもう一つレバーがあるだろ。デュアルコントロールレバーって言ってな、ハンドルを握ったまま変速ができるんだ。ここを内側にこう押し込むと変速ができて——」

といった感じで、乗る前に兄ちゃんはロードバイクについて簡単に教えてくれた。変速の方法。停止するときの注意点とコツ。縦列走行をする時の、停止や右左折、減速などと

いった手信号。

それから、実際に乗ってみることになった。

最初は怖かった。乗る前にサドルの高さは調整してもらったけど、それでもすごく高い。サドルに腰を下ろした状態で足を下に伸ばしても、地面につま先がようやく着くくらい。このくらいが一番走りやすい高さって兄ちゃんは言っていたけど、足が着かないのはちょっと不安だった。

ハンドルの高さがサドルの位置よりも低くなっているから、乗車姿勢も自然と前傾になる。ママチャリみたいになったりとサドルに座るんじゃないかと、ハンドルを握る手にも体重が乗る。大げさかもしれないけど、もし手の力を抜いたらそのまま地面に突っ込みそうなくらいだ。そんな状態で前を向かなきゃいけないから、首が微妙に痛かった。

兄ちゃんのロードバイクのフレームはとても細くて、まるで蚊トンボ。タイヤもママチャリのよりずっと細くて、石みたいに硬くて、表面には凹凸がほとんどない。車体を傾けたらスリップしそう。

そして、ドロップハンドル。どこをどうすればこんな奇妙な形のハンドルになるのか。最初はどこを持っていいのかもわからなかった。

こんなのに体を預けるんだから、漕ぎ出すときにはとても勇気が要った。本当にこんなのを乗りこなせるのになって。

でも、いったんペダルを漕ぎ始めるとそういう不安はすぐに消し飛んで、なんとというか……本当にびっくりした。

自転車があんなに気持ちのいい乗り物だなんて、僕は思わなかったんだ。

本当に、ママチャリなんかとは比べ物にならない。もう、全く別の乗り物だ。

まず、漕ぎ出しが軽い。ちよつとペダルに力を入れただけで、すんと自転車は走り出す。ふらふらと不安定だったのも最初だけ。スピードが乗ると、軌道はびたりと安定して、まっすぐと走り出す。

そこから先は、未知の世界だった。

特に力を込めてペダルを回しているつもりはなかった。それなのに、ペダルを踏めば踏むほどに車体にスピードが乗っていくんだ。踏み込んだ力がどこにも逃げることなく、余すことなくしっかりと車体に伝わり、どんどん推進力へと変換されていくのが分かる。ママチャリではどんなにペダルを踏んでも、フレームはギシギシときしみ、どこかに力が漏れているような感覚がいつも付きまどっていた。でも、この自転車にはそれが無い。自分の思い通りに、込めた力に、素直に反応してくれるんだ。それは、とても心地のいいことだった。

ステムの部分に取り付けられていたサイクルコンピュータが示す速度は、時速二十五キロ。大して力を込めなくてもこんなにスピードが出る。なら。本気で漕げばどのくらいまでスピードが上がるのだろう。気になって、僕は一気にペダルを踏み込んだ。

三十……三十三……三十五……三十七……

速度が上がるほどにどんどん息苦しくなっていく。太腿の内から何か膨れ上がっていきような圧迫感が生まれてくる。前方から押し寄せる風の抵抗が、僕の行く手を阻むように立ちはだかる。それをぶち抜くように、さらに足に力を込めた。

三十八……三十九…………四十キロ！

そこまで到達して、僕は脚から力を抜いた。

はあ、はあ、と息をつく。

「どうだロードは。楽しいだろ？」

いつの間にか後ろに追いついていた兄ちゃんが言う。

「うん。すごい……」

四十キロ。車とほとんど変わらないスピード。それを、道具を介しているとはいえ自分の力でたたき出したんだ。そっか。ロードって、こんなにすごい乗り物だったんだ。僕の非力な力を、最大限にまで増幅してくれる。

ロードバイク。

細いフレームは軽量化を実現するために。細いタイヤは路面との摩擦を抑えるために。高いサドルは脚の力をより引き出すために。低いハンドルは空気抵抗の軽減と最も力の入りやすい理想的なフォームを実現させるために……そのあり方すべてが、より速く走るというただ一つの目的のためだけに磨き上げられ、進化してきた自転車。

それを使えば、たとえ運動が苦手だった僕でもこれほどまで速く走れるのか――。

それは、たった一時間程度のサイクリングだった。ただ河川敷にそって走るだけの、簡単なコース。それでも、自転車の見せた新しい世界に、僕は完全に魅了されていた。

三 レーススタート

開会式は十五分程度であっさりと終わり、選手たちの一部はすぐにスタート地点へと向かい始めた。

開会式にはたくさんの方が参加者が集まっていた。さすが阿蘇を舞台とするヒルクライムレース。県内外からたくさんの方の自転車乗りが参加しに来る。受付の時にもらったスタートリストを見たけど、四〇〇人以上の選手が登録しているようだ。すごい人数だけど、ここにいる人たちがみんなが僕の敵というわけじゃない。この大会ではいくつかクラス分けがされてあって、レースもそのクラスごとに行われるんだ。

まず、チャンピオンクラス。これは言ってみれば無差別級だ。十五歳以上なら年齢に関係なく出られるクラスだけど、名前の通りここではかなりハイレベルのレースが繰り広げ

られる。

そして、チャレンジクラス。走るコースはチャンピオンクラスと変わらないけれど、このクラス内ではさらに年齢別にクラス分けがなされている。Aクラスは十五歳から二十二歳、Bクラスが二十三歳から三十歳。さらにC、Dと続き、Eクラスが六十歳以上。

スタート順は、チャンピオンクラスが最初にスタートし、それから五分おきにチャレンジクラスのA、B、Cと順に走り出すことになる。

ちなみに、僕が出場するのはチャレンジAクラス。高校生とか大学生とかが出場するところだ。申し込みの時はチャンピオンクラスへの出場も考えたけれども、自転車歴一年にも満たない僕じゃ、たぶん勝負にもならない。自分の実力を十分に考えてのクラス選択だった。

とはいえ、チャレンジクラスの中で一位を取るのも簡単じゃない。Aクラスの参加者は七十人以上もいるし、チャンピオンクラスに劣るとはいつても、その中には自転車を部活としてやっていたり、クラブチームに所属して普段からトレーニングをこなしたりしている人もいる。レベル自体は低いわけじゃない。

その人たち相手に、たった一人で走り続けてきた僕の実力はどこまで通用するのだろうか。自分の実力を知りたいと思う反面、今までの努力が大した成果を生み出さなかった時のことを考えると、怖くも感じる。

僕は兄ちゃんの車のところへ戻った。

ヘルメットをしっかりとかぶり直し、グローブを手にはめる。ボトルの水を入れ替えて、計二つのボトルを自転車のボトルゲージに装着する。

「もうスタートか？」

ローラー台を車に直しながら兄ちゃんが言った。

「あと十分くらい」

「そっか」

兄ちゃんは空を見上げる。僕もつられて。相変わらずのいい天気。でも、今は夏。この天気はレース参加者にとって最大の敵になるかもしれない。

「今更なアドバイスだが、水分はこまめに摂っておけよ。のどが渴いた時点で手遅れと思え。脱水症状でリタイアなんてシャレにならないだろ」

「うん。わかった」

自転車には六〇〇ミリリットルのボトルを二つ取り付けている。これで足りないということはないだろう。

「あと、ペース配分には注意しろよ。序盤はどんなに余裕があっても集団の中で体力温存。アタックをかけるのは中盤以降だ。お前のトップスピードなら簡単に逃げも決まるかもしれないが、それを維持するスタミナが……」

「はいはい、わかってるって」

畳み掛けるように言う兄ちゃんを適当にあしらう。弟思いなのはうれしいけれども、

自分でもわかり切っている欠点をしつこく言われるのは勘弁。

「じゃ、行ってくる」

僕は自転車を押しながらスタート地点へと向かった。

「頑張ってこい」

兄ちゃんの声が、僕の背中を押した。

チャンピオンクラスが出発し、ようやくAクラスの僕らはスタート地点への侵入が許可された。少しでもいいスターティングポジションを確保しようと、みんな一斉に押し寄せる。僕は押し負けて、真ん中よりやや後ろ辺りに陣取ることになった。

スタートラインに立つと緊張はさらに大きくなってくる。僕の周りにはたくさんの選手。それぞれの息遣いまでもが聞こえてくるくらい、密集している。

みんな、学校やチームの、有名ブランドのカラフルなジャージに身を包んでいる。一方、僕が着ているのはネット通販で買った無地の安物。別にウェアの違いで実力が変わるわけではないけれども、どこか場違いな場所にいるような気がしてすこし肩身が狭い。

心を落ち着かせるため、目をつむり、深呼吸。

頭の中で、今回のレースのコース内容を確認してみる。

まず、スタート地点を出発してから一キロは平地区間。その先にあるのが、今回メインとなる山岳コース、阿蘇ミルクロードだ。序盤から急勾配の続くかなりハードな道で、ふもとから十五キロ先のかぶと岩展望所まではひたすらにペダルをこぎ続けなければならぬ。かぶと岩展望所を通り過ぎてからは、阿蘇外輪山の尾根に沿った起伏の連続する道を十キロ。その先に、ゴール地点である大観峰がある。

総距離約二十六キロ。標高差八〇〇メートル。

難易度の高い道とっていい。金峰山なんかとは比べ物にならないくらいに。兄ちゃんの指摘通り、ペース配分を間違えば、完走だって難しくなる。

『チャレンジAクラス、スタート十秒前です』

アナウンスが流れた。

あと十秒……ついにスタートだ。

僕は左足のシューズをペダルに連結させる。靴底のクリートと呼ばれる器具を結合。ペダルに引っ掛け、押し込む。

僕は唾を飲み込んだ。落ち着かせたはずの心臓の音が再び大きくなる。

『五秒前。四、三、』

何度も深呼吸。自然と、ハンドルを握る手に力がこもる。

『二、一——』

パンツ！

ピストルの音とともに、僕は右足で地面を蹴った。蹴った後、高揚する気持ちを抑え、落ち着きながらすぐに右足をペダルに乗せ、体重をかけるようにして踏み込む。かちやり

という音。よし、クリートキャッチ成功。僕の脚は自転車と一体化する。

同様の音が周囲から一斉に鳴る。

チェーンの擦過音が会場を埋め尽くす。

景色が動き出す。

……まあ、スタートしたとはいっても、すぐにレースが始まるわけじゃない。

最初の数百メートルはパレードランといって、観客への顔見せの意味合いを持つ区間。みんなのんびりと走る。別に競り合いをしてもルール上は問題ないけれども、そこは暗黙の了解ってやつだ。道のわきにちらほらと見える観客の拍手や声援を受けながら、僕は設定されていた周回コースを軽く一周し、国道へ。

国道へ出ると、周囲から一斉にシフトチェンジの音が鳴り、集団のスピードが急に跳ね上がった。

ここでようやくレース開始だ。

レース開始地点からミルクロードの入口までは一キロの平地区間。それを集団は時速四十キロ超を維持しながら走る。ミルクロードに備えてか、誰もアタックをかけることなく、ひと塊になっての走行。そもそも一キロ程度の距離でアタックしたところで、大したリードを取ることもできない。無駄に疲れて、すぐに登りで捕まる。なら、体力温存に集中した方がいいとの考えからだろう。

時速四十キロというのは平地の苦手な僕にとってはややハイペースではあるけど、集団の中になれば走る際の空気抵抗が大きく軽減されるからかなり楽に走れた。

走りながら、少しずつ前に移動を試みてみた。集団内で体力温存にしても、できればいい位置取りはしたい。でも、密集した集団の中ではなかなか身動きが取れない。ちょっとふらつくだけで隣の人のハンドルや前を走る自転車の後輪に接触しそうなほど。自分なりに頑張っては見たけど、けっきょく、集団の前方三分の一くらいまでが限界で、しばらくはそこでくすぶることになった。

まあいいか。

山岳コースに入れば集団も散り始める。それから前方に移動すればいい。

そのまま集団は動きのないままミルクロード入口、登坂開始ポイントを通過。

いよいよ山岳コースへ突入する。

集団は平地を走ってきた勢いそのままに駆け上がった。けれども、立ちはだかる急こう配にすぐに勢いを殺され、スピードを落とし、けっきょく時速十数キロくらいで安定。そのままのペースで集団は山を登っていくことになった。

しつこいようだけど、ミルクロードは自転車に登るには難易度の高い道だ。みんな後半に脚を残しておこうという意図なのか、明らかに緩いペース。集団はのそのそと上り坂を進行していく。

ハンドルが触れそうなほどだった選手間の密集状態もある程度解消されてきた。僕は脚

に疲れが出ない程度にペースを上げてゆつくりと集団の前方に移動した。集団の先頭を走る選手たちを視界に入れた状態で、ペース固定。後々に備えて体力温存に努める。

山岳コースに突入してから二キロくらいまでは誰一人としてアタックをかけようとはしなかった。集団の後ろの方では早くも集団から逸れていく脱落者が出ているようだったけれども、集団は気にも留めずに進んでいく。

二キロ地点を通過すると、そろそろ小アタックをかける選手が出始めてくる。どのアタックもすぐにペースを上げた集団に飲み込まれてつぶされてしまう程度の軽いものだったけれども、そのたびにちよつとずつ集団全体のスピードが上がっていく。それについて行けなくなった選手が次々と集団から脱落していった。それを狙ったアタックだったのかもしれない。飛び出した選手も体力を使うけど、それを追う集団の方も相応の体力を削られる。登り始めて四キロ地点を通過したところには、集団はスタート時の半分程度になっていた。

それでも、誰かが独走するような展開は起こらなかった。

そんなレースが急に大きな展開を見せたのは、山岳コース五キロ地点のフラッグを通過したころだった。

五キロ地点を通過してすぐのところ、登りの傾斜が急にきつくなった。

道路わきの標識によると、斜度十二パーセント。体感ではもつと急な気もする。激坂だ。当然、今までと同じスピードでは登れない。集団はそこでスピードを大きく落とした。

そう、集団がスピードを落としたその一瞬のことだ。

その間隙を突くようにして、一人の青いジャージを着た選手が集団から飛び出し、アタックをかけたんだ。

お手本のような、きれいなダンシング。まるで階段でも駆け上るように、すいすいとペダルを踏み込み、斜度十パーセント超の激坂をこなしていく。

見ればわかる。今までの小アタックとは違う。明らかに独走態勢に持ち込むための、「逃げ」のための本格的なアタックだ。

この激坂区間でアタックを許せば、決定的な差がついてしまう。逃がすわけにはいかない。他の選手はすでに反応して追走態勢に入っている。僕もすぐに追うことにした。

変速レバーをクリック。ギアを一段上げる。サドルから尻を離し、ダンシング。重くなったペダルに体重をかけ踏み抜いて、急勾配をぐいぐいと乗り越えていく。

踏むたびに脚の奥に疲れが積もっていくのが分かる。でも、ここで離されたら二度と追いつけなくなる。

必死になって食らいつく。

周りの選手は一人、また一人とペースについて行けず力尽きて僕の視界から後方へと流れていく。ほんの百メートル程度の激坂区間で、集団は縦長にすっかり伸び切り、散り散りになった。

先頭の選手は激坂区間を乗り切ると、傾斜が楽になった分、さらにスピードを上げ始め

た。広がる差を埋めようと、僕ら追走組は必死にそれを追いかけた。先頭の選手との差は十メートル弱。すぐそこに見えるのに、あまりにも遠く感じる。

自然と、追走集団で先頭交代が行われ始める。先頭を引いていた人のスピードが落ち始めると別の誰かが前に出て、ペースメーカーとなってほかの人たちを率いる。その人のスピードが落ち始めると、今度は次の人が……そうやって、先頭を走る負担を分担し合い、「追いつく」という共通目的の達成を目指す。

その中で何人もの選手がまた脱落していった。このペースに食らいつけているのは、僕に見える範囲で五、六人だけだった。後ろからもチェーンの軋む音がいくつか聞こえていたから、もう少しはいたかもしれない。

でも、それもしばらくしたらどんどん遠くに消えてしまう。

六キロ地点通過。

先頭のスピードはまだ衰えない。

なんとか数メートル後ろにまで詰めることはできたけれど、それが限界。追い抜くことができない。その間に、また一人、さらに一人、と追走組から逸れていった。人数が減れば先頭交代による負担の分担もうまく回らなくなる。

僕の息もとづくに切れ、脚も重くなってきた。心拍数は一八〇超。僕の最大心拍数の約九十パーセントを示している。ここまでくるとほとんど無呼吸運動だ。ただでさえスタミナに難のある僕だ。いよいよ危機感がよぎってくる。

まずい。このままじゃ僕も脱落者の一人になってしまいかもしれない。

戦々恐々としながら、それでも僕はペダルを回し続けた。

先頭を走る青ジャージがようやくスピードを緩めたのは、七キロ地点を示すフラッグを通過してしばらくたってからだった。

単純に脚が疲れたのか。それとも、次のアタックに向けて体力の回復、温存に努めようという腹なのか。

どちらにせよ助かった。

追走集団の間にも安堵の空気が流れる。どんな意図があるにせよ、ようやくハイペースから解放されたのだから。追走組はそのまま先頭の選手を飲み込み、小集団を形成してローペースで進んでいく。

それにしてもこの二キロにもわたるロングアタック。その効果はテキメンといい。集団は見る影もなく崩壊。先頭集団も絞り込まれた。

気が付けば、先頭集団は僕を含めてたった四人だ。どの人も、どこかで見たことのあるようなチームジャージを着ている。先頭から順に、アタックを決めた青ジャージの選手、黄色いチームジャージを着ている選手、そして市立高校の自転車部のジャージを着ている選手。選手番号はそれぞれ「A-10」「A-24」「A-47」。そして、選手番号「A-53」の僕が集団の最後尾にくっついている。ずいぶん絞り込まれたものだ。ここまで食らいついて来るくらいなのだから、みんな登りに強い人たちに違いない。きっと、優勝はこの中の

誰かになるだろう。

そして、その中で一際強い存在感を放っているのは、やっぱりアタックを決めた青いサイクルジャージを着た「A-10」の選手だ。背中には黄色い字で彼の所属しているチーム「Blue Bares」のロゴがプリントされている。

ブルーベアーズ。九州圏内のサイクリストには名の知られた自転車のチームだ。市内の老舗サイクルショップを中心に結成されていると聞いている。実業団認定はされていないけど、それに準ずるチーム力を持っているとネットでももっぱらの評判だ。

そんなチームの一員がなんでチャレンジクラスなんかに出ているのだろうか。もちろん、そのチームに入っているからといって必ずしも速いなんてことはないだろうけど、この人は間違いなくチャンピオンクラスレベルの登坂能力を持つてる。あの激坂であれだけのアタックを決め、ここまで選手を振るい落としてきたのが何よりの証拠。そして今なお、疲れを見せずに走り続けている。

これほどの実力を持つ人がどうしてこんなクラスに？

でも、それは考えたって仕方のないことだとすぐに思い直す。今は頭よりも脚を動かさなくては。

僕はボトルを取り、このレースが始まって初めての水分補給をした。のどがカラカラだ。

「ぶら」

まだ先は長いのに、かなり体力を消耗させられてしまった。心拍計も依然として高い数値を出している。どうにかして回復を図らないと後半でかなり不利になる。僕は立ち漕ぎをしたり、サドルに乗せている尻の位置をずらしたりして、ペダルを漕ぐのに使う筋肉を変えてみる。傾斜に合わせてギアを切り替え、できる限り回転数を一定に維持するように心がける。

もう一度、先頭集団を見渡してみた。

今は集団として同じペースで走っているけれども、どこかで僕もアタックをかけて差をつけなければならぬ。もちろん、ここにいる人たちはみんな登りに強い選手だし、「A-10」の選手にいたっては言わずもがな。下手なアタックは簡単につぶされてしまうだろう。最良のタイミングで最速のスピードを出さなければ、僕に勝機はない。

さて、どうすべきか……。

他の選手も同じように思案しているはずだ。体力回復につとめながらもお互いに動きを監視し合ってる。だからこそ、この硬直状態が発生している。この辺りの駆け引きは経験が生きてくるところ。僕には不利な状況かもしれない。

そのまま、何の動きもなく集団は進んでいった。

何分か毎に先頭交代をしながら互いの負担を分担し合う。勝負所まではみんな体力はできる限り温存したい。その利害が一致している以上、さっきの追走のように何も言わなくても協力体制はできてしまうものだ。空気抵抗のほとんどない登坂での先頭交代は無意味

に見えるかもしれないけど、後ろから迫られているというプレッシャーやペースメーカーとしての負担は軽減できる。

僕も何回か先頭に出ることになった。そんな風に先頭を走って行くと、なんだか不思議な感覚になる。何人もの選手が脱落している中、わずか数人の先頭集団を僕が引いているんだ。自分もこの優勝争いに絡む人物として認められているようで、少しだけ誇らしくも感じた。

そうして、何回目かの先頭を終えて集団の後方へ下がるときだった。

集団がそろそろ九キロ地点に差し掛かろうとしていたころ。

「ちよつといいかな？」

そんな風に声をかけられた。何事かと振り返る。僕のすぐそばを、ブルーベアーズ「A-10」の選手が並走していた。どうしたのだろう。僕が何か話しかけられるようなことでもしたのかな。

「あの、僕に何か用でしょうか？」

戸惑いながらも返事をする。今は緩いペースで走っているから、会話するくらいの余裕はあった。

「別に大したことではないんだ。ちよつと気になったことがあってね」

聞きたいこと？　なんだろう。不思議に思っていると、　「A-10」の選手は僕のロードのチェリストカラーのフレームを指差した。

「そのロードピアンキってクロモリ？」

何事かと構えていれば、なんだそんなことか。本当に大したことのない質問だった。でも、問われたことには答えなければ。

「まあ、見ての通りクロモリですけど」

ロードバイクに使われるフレーム素材にはだいたい四種類ある。クロモリ、アルミ、カーボン、チタン。塗装されてしまえば外見だけでそれらを判別するのは難しいかもしれないけども、クロモリのロードにはフレームパイプが細いという特徴があるから、一目見ればだいたい判別がつく。他の素材だと、強度を確保するためにある程度パイプを太くする必要があるけど、クロモリはもともと強度の高い素材だからその必要がないんだ。

「やっぱりクロモリかあ。それにしてもすごいね、いまだきクロモリなんて。重くなかった？　ここまでついてくるのも大変だったでしょう？」

指摘された通り、クロモリはほかの素材に比べて重量が重いという欠点がある。そもそも鉄の合金だし。昔は自転車素材の主流だったけれども、最近じゃアルミとカーボンに押されて、レース用の機材としてはほとんど時代遅れの素材になってしまった。ましてやこんなヒルクライムレースで重いクロモリを好んで使う人はそうそういないかもしれない。

「僕は特に意識したことはないですね。これにしか乗ったことがないから、比較対象ないですし」

最初からずっとクロモリに乗ってきた僕には、「クロモリは重い」と言われてもあまりピンとくる話じゃない。そりゃあ軽くなれば登りでは楽になるだろうけど、たかだか一キロ二キロ重さが違うだけでそんなに変わるものなのかなって思う。実際にほかの素材と乗り比べてみれば何かが変わるかもしれないけど。

「なるほど、一台目なんだ」

「自転車は去年始めたばかりで。この自転車ももともとは兄ちゃんが乗ってたやつなんですよ」

「へえ、お兄さんが」

「A-10」の選手は改めて僕の自転車を見つめる。どこか懐かしいものを見るような目だった。いったいどうしたのだろう。

「いや、ちょっとね。知り合いにこれと似た自転車を使っている人がいたからさ」

「ビアンキって人気ですしね。使ってる人多いし」

「確かにそうなんだけどね。……あ、そういえば自己紹介がまだだったね。俺はキクラって言うんだ。木に倉庫の倉で木倉。きみの名前は？」

名乗られたからにはこちらも名乗らなければならぬ。

「僕は猪部いのすといいます。猪に、部活の部で」

僕の名前を聞いた木倉さんは、「へえ」小さく声を漏らした。何かに納得したようにうんうんとうなずいた。

「なるほど、君が。あ、下の名前も聞いていいかな？」

「成なる、と言います」

「猪部成くんか。うん、よろしく。このままゴールまで頑張ろう」

木倉さんは右手をこちらの方に差し出した。僕もすぐに手を出して、握手をした。

こういう選手間でのコミュニケーションも自転車レースにはつきもの。ツール・ド・フランスの中継を見たときも、選手同士が何か話していたりする光景はよくあった。敵であっても協力することが多い自転車レースでは、こういうコミュニケーションは重要だ。

とはいえ、いつまでもしゃべっている場合じゃない。先頭交代にも加わらなきゃならぬし、余裕があるといつてもしゃべればその分呼吸が乱れる。僕は木倉さんに軽く会釈をして、後方に下がる。

「あ、そうそう。こうして会えたのも何かの縁だし、一つだけいいこと教えてあげるよ」

そんな僕を、木倉さんは呼び止めた。

「いいこと？」

「たぶん、あと二キロくらい進むとね、また急に傾斜のきつくなるところがあるんだよね」
すごい、コースの細かい内容まで覚えているなんて。僕も事前に試走はしたし、コース内容はある程度頭に入れていたつもりだったけど、傾斜の細かい変化までは覚えていない。

そんな風に僕が感心していると、木倉さんは僕の方に顔を近づけながら声を潜めて、こう続けた。

「俺はそこでまたアタックをかけるつもりだ」

一瞬で思考が固まった。

「え、アタックって……え？」

訳が分からない。

「そのままだよ。集団から飛び出して、そのままゴールを狙うつもり」

ゴールまで十五キロは残っている。そのうち登り区間は五キロ。残りの十キロだって、アッパダウンの続くハードな道だ。それを逃げ切るつもりなのか。この人の体力ならたぶんそれが可能なのだろうけど。

いや、そもそもどうしてそんな情報を僕に漏らすのだろうか。

アタックを成功させるには、体力もそうだけど何よりタイミングが重要だ。たとえば、敵の隙を突く形でアタックが決まれば、敵の追走はワテンポ遅れ、より遠くまで独走態勢に持つていくことができる。そのまま逃げ切ることもできるかもしれない。

逆に、アタックが読まれてしまったら、すぐに反応されてつぶされるし、そもそも事前に進路を塞がれてアタックそのものを阻止されることだってある。

「なんのつもりです？」

これはレースだ。勝者は一人。なんだかんだでみんな敵なんだ。それなのに、自分の手の内を敵に堂々とさらすなんて。

「ちよつとしたサービスだよ。まあ、どう対処するかは、きみ次第だけどね」

木倉さんは何かを楽ししむようににやにや笑うと、そのまま僕から離れて前方へと移動し、先頭と交代。集団を引き始める。

しばらく呆けた後、僕はすぐに木倉さんを追いかけ、後ろにびったりと引っ付いた。

何が目的でその情報を僕にくれたのか、わからない。ブラフかもしれない。でも、アタックする可能性があるのだから、マークしないわけにはいかない。

——試してやる。ついて来られるものなら、ついて来い。

その背中にそう言われてるような気がした。

自転車始めた頃の頃は、レースに出ようなんて気はこれっぽっちもなく、それこそ自転車に乗ることそのものを楽しんでいたような気がする。

特に行き先も決めずにぶらぶらと走ってみたり、バスとか車で行けるような場所に用事があるときなんかはあえて自転車で走ってみたり。

そのころは本当にかもが新鮮だった。

ペダルに力を込めたときにフレームの軋む音とか、全身の力がもれなく推進力に変換されていくあの一体感とか、手垢のしみこんだバーテープのすべすべした感触とか、カビ臭いにおいとか、風の中を押し切って走る時の後ろに押し戻されるような感覚とか、目まぐるしく変わる景色とか。

そんな特別でもないことが僕を楽しませた。

毎日心躍らせながら自転車に乗っていた。

でも、それだけじゃすぐに物足りなくなってくる。おいしい料理でも毎日食べていれば飽きると同じで、ロードバイクに乗ることそのものが当たり前になってしまうと、何の感動もわかなくなってくる。そうになると、違う味付けをするようになった。

そのうち、自分であらかじめ目的地を決めてそこに出かける、本格的なサイクリングをし始めるようになった。

地元で有名な観光地を自転車で巡ってみたり、温泉地へ行ってお風呂を堪能したり、各地の美味しいお店とか名産物とかを食べに行ったり。サイクリングでは兄ちゃんと一緒に行動することも多くて、よく知らない場所に連れて行ってもらったりもした。

そういうことをしているうちに自然と体力もついてきて、一度に走る距離もどんどん伸びていった。最初の頃は三十キロ程度。それが四十、六十とどんどん距離が伸びていき、一日に一〇〇キロを走ることもざら。一日かけて二〇〇キロ以上の道のりを走ったこともあった。さすがにこの時は体中ぼろぼろで次の日まで疲れを残すことになったけれども、これだけの距離を走ったことは僕の中で確かな自信になっていったと思う。

そんな風に、自転車に乗り続けていたある日のことだった。

その日、僕は朝の九時ごろに自転車にまたがって家を出た。別に行き先を決めていたわけではない。適当にふらつくのが目的のポタリング。とりあえずは、定番コースの金峰山を目指す。金峰山は僕のお気に入りのコースだった。手近な山だし、景色もいい。傾斜も程よい。多種多様な坂が用意されているから、クライマーにはたまらない土地だ。とりあ

えずは中腹にある峠の茶屋公園まで走る。そこからは、気分次第で頂上に行くか、玉名方面に下るか、もう少し山を散策するか、決めよう。

金峰山のふもとまでは三十分程度で到着。そのまま登り始める。ぐいぐいとペダルを踏み込んで、住宅地の中を走る直線を進み、森の中へ。森に入ると蛇行した道が延々と続く。

この日は妙に調子が良かった。いくら踏み込んでも疲れはたまらなかったし、息もそこまで乱れない。こんな日は登っていて楽しい。僕はさらにペダルを踏み込んで、どんどんスピードを上げていった。

そんな風に、意気揚々と登り始めてから五分ほどたったころ。

僕はそれを聞いた。

風の中にかすかに漂ってくる、地鳴りにも似た音。それが、後ろの方からどんどん近づいてくるのが分かった。車でも来てるのだろうか。

道を譲るため僕は走りながら自転車を道路の左側へ寄せ、後ろに振り返る。木々に遮られてよく見えないけれども、木々の間に銀色の細長い何かが見えたらと光ってみえた。それは、まるで大蛇のように、滑るように走ってくる。

車じゃない。よく見れば、その銀色の正体は自転車のホイールだった。

五台の自転車がきれいな縦列を作って、走ってきていた。一糸乱れぬ動き。まるで五台で一つの生き物のようだった。ぬるぬるとコーナーを曲がり、僕の方へと近づいてくる……と思った時にはすでに蛇は僕のすぐ右側を通過していた。

一様に、青色のレーサージャージと、とれと同じデザインのレーサーパンツ。まだそれほど日差しの強い季節ではないのに、露出した肌は汗で覆われ赤黒く光り、筋肉のうねりの一つ一つがはっきりと見て取れる。

チェーンの擦過音と、タイヤと路面の接触音、乗り手一人一人の息遣いが、風をまもって僕を押しつける。

速い。

集団はまるでその辺の小石を避けるように、一瞥もしないで僕を抜き去っていった。

僕だって結構なスピードを出していたのに。それを、あっさりと。

どんどん離れていく集団最後尾の背中。

なんだか悔しくなって、僕はその集団を追いかけるためにペダルを思いっきり踏み込む。登りにはある程度自信があった。脚質の違いはあったとはいえ、競技経験のある兄ちゃんと登りで競争して勝ったことだってある。

それなのに、僕がどんなにペダルに力を込めても、一向に追いつくことができなかった。いくら漕いでも、いくらスピードを上げても、その背中との距離は変わらない。疲れだけがどんどんたまって行って、息苦しくなって、体が動かなくなってくる。

一方、集団の方はそんな気配を一切見せることなく、僕との距離をだんだん広げていく。結局、僕が引っ付いていられたのはほんの五〇〇メートル程度で、それから先はどんどん小さくなっていくその背中を見ていることしかできなかった。

「青いジャージ？ ああ、もしかしたら青熊かな、それ」

その日の夜。そのことを話すと、兄ちゃんは首を傾げながらそう言った。

「あおくま？」

「ブルーベアーズ。通称青熊。熊田自転車店って自転車屋の常連が集まって作ったレーシングチーム。そのチームジャージが青色なんだよ。たぶん、県内じゃ一番速いチームじゃないかな。俺の知り合いも何人かいてな。それつながりでたまに一緒に走ったこともあるけどやっぱりみんな速いよ。自転車始めて半年程度のお前じゃ相手にならんわな。ま、相手が集団走行してたのもあるだろうけど」

集団走行をすればその分一人にかかる負担は軽減する。素人の僕でもそのくらいの知識はあった。とはいえ、あれは登りだ。登りにおける集団走行の疲労軽減効果は平地ほど大きくはないはずだ。

「レーシングチームか……」

「なんだ、レースに興味があるのか？」

「いや、別にそういうわけではないんだけど」

でも、僕の抜き去ったあの青いシャージの後姿は、いつまでも僕の頭の中に焼付いたままだった。

四 アタック

登坂区間十キロ地点に到達したころ、急に周囲の風景が開けてきた。

それまでは森の中を走る道だったのが、山の斜面にそって広がる牧野に変わった。緑の絨毯には放牧されている赤毛の牛がちらほら。地面に口をつけてむしゃむしゃと草を食んでいる個体もいれば、横になって不思議そうにこちらを見ている個体もある。普通にサイクリングをしていけば、僕はのんびりとしたその風景を楽しむこともできただろう。

でも、今はレース中。そんな余裕はない。

それに、森から出たことよって新しい敵に直面することになった。

直射日光だ。今までは森の中にいたけれども、森を抜けたら否応なしに晒されることになる。露出した肌がひりひりと痛み、体温が跳ね上がる。それを調整しようと汗が噴き出る。これは、想像以上に身体から体力を奪っていく。

その影響からか、「A-24」の選手が森を出たあたりから急に集団から遅れ始めた。この日差しに、とうとう疲労がピークに達したのだろう。集団から少しずつ距離もつき始めて

いる。脱落は時間の問題だろう。

まだ生き残っている他の二人も、どことなく表情が陰しくなっているように見える。体中は汗味まみれ。乾いた口はうっすらと開かれたまま。目線も、道の先より前輪タイヤの接地面を見ていることが多くなってきた。水分補給のペースが早くなってきた。

僕だってもうぎりぎりのところまで来ている。

日差しに、肌がひりひりと痛む。のどはカラカラ。いくら水を口に含んでも解消されない。脚の疲労の方もすでに無視できるレベルじゃなくなっている。このペースを維持する分にはいいとしても、たとえば木倉さんがこの先予告通りアタックをしたとしたら、それを追撃できるだけの力が出るかは微妙なところだ。

木倉さんは、十一キロ地点でアタックをかけると言っていた。そろそろ動き出すはず。

僕はしっかりと木倉さんの後ろに付き、僕が先頭を走る番になった時は後ろから聞こえるペダリングの音や地面に映る影を頼りに、できる限り動きに注視した。

素人なりに、できることはやっておかないと。

予想外のところで、レースが動いた。

ちょうど先頭を走っていた僕と二番手を走っていた「A-47」が入れ替わろうとしていた時だった。僕はスピードを緩め、集団の後ろの方、木倉さんのすぐ後ろへと下がろうとしていた。その時、これから先頭を担当する「A-47」の選手が、急激にスピードを上げた。

ギアを切り換え、サドルから腰を上げ、自転車を左右に傾けさせながらぐいぐいとペダルを踏み込んでいく。木倉さんがやっていたダンシングよりは荒々しくて、力任せな漕ぎ方だ。でも、後ろに下がるためにペダルへの力を一気に緩めていた上に、木倉さんばかりに気を取られていた僕にとっては十分効果的なアタックだった。

——しまった！

敵は木倉さんだけではないというのに、それを失念してしまうなんて。

でも、そう思っていた時にはすでに手遅れ。

反応が大きく遅れてしまった。ぐいぐいと距離を放されてしまう。

そのまま「A-47」はさらに距離を稼ごうとペダルを踏み込んで――

「おっと、どこに行く気だい？」

そんな間の抜けた声とともに、その進路を木倉さんの機体に阻まれた。

それは、一瞬の出来事だ。先頭交代の隙を見計らった「A-47」のアタックはたしかに絶妙なもので、一番近くにいた僕はほとんど反応ができなかった。

でも、木倉さんはすぐそれに反応した。すぐさまギアを上げて加速。僕の横をすり抜け、あつという間に「A-47」の進路上に割り込んだ。僕の後ろにいたはずなのに。なんて瞬発力、加速力だ。

「くっ」

そんな声を漏らしながら、「A-47」の選手はサドルに腰を下ろす。さすがに進路上に割

り込まれてはそれ以上先に進むことはかなわない。減速し、肩を上下させ、うなだれる。きつと、疲労の中で絞り出した渾身のアタックだったのだろう。全力をかけたはずの加速。それを、後ろから追い抜かれた。ショックは大きい。そして、急加速とその後の急制動は当然の結果として身体に相当な負担にもなっているはず。

僕は変速レバーに指をかけた。感心している場合じゃない。これはチャンスだ。

「A-47」はともかく、それに追いつくために木倉さんも脚を使ったはず。なおかつ今は「A-47」に気を取られている。

仕掛けるなら今。

そのままレバーを押し込み、ギアを一段切り替える。かちやり、という音が鳴る。

そのままペダルを踏……と、思った瞬間、今度は僕の進路上に木倉さんの機体が割り込んできた。

「狙いは悪くないけどね」

僕のアタックをつぶすのに木倉さんは加速する必要もなかった。この時木倉さんの方が僕よりも前にいたのだから、ハンドルを操作し、僕の前に移動すればいいだけの話。

それだけで、僕のアタックは不発した。僕はおとなしくギアを落とす。

驚くばかりだ。木倉さんは僕のアタックの発動を事前に察知してそれを防いだ。

さっきの「A-47」のアタックの場合は、木倉さんがその選手のすぐ後ろにいたから、その様子をよく観察できたはずだ。だからこそアタックに速やかに反応できた。いや、そもそも「A-47」の選手の挙動からアタックすることがある程度予知できていても不思議はない。経験を積んだ選手ならそのくらいやりかねない。

でも、その時とは違って木倉さんは僕のアタックをつぶしたとき、僕よりも前にいた。

目で僕の動きを観察することなんてできないはずだ。

「まさか変速の音で？」

「レースのコツはね、周囲をよく観察することだよ。目で、耳で、肌で。五感全てでレースを感じ取るんだ。覚えておくといい」

こちらを振り返りながら、そんなことを説明する余裕さえ見せる。

なんて人だ。肉体面、技術面、知略面。あらゆる点において抜きん出ている。レベルが違いすぎる。勝てるビジョンが全く浮かんでこない。

これほどの実力差があるのに、もう一度アタックを決められてしまったら、どうなるか。レース序盤でのアタックは、他の人と協調できたから追いかけられたようなものだ。でも、今は木倉さんに対抗できるのは僕と「A-47」の立った二人。「A-47」はさっきおアタックで脚を使ってしまった。木倉さんの言っていたアタックポイント「傾斜が急になるところ」までどのくらい距離があるのかはわからないけれども、それまでにその疲労を回復させるのは不可能だろう。後ろの方でぶつぶつと「A-24」はたぶんもう無理か。そんなことを考えていると不意に、かつんというかすかな変速音が前方から聞こえた。

僕や「A-47」のつけている安物のコンポーネントじゃない。もっとグレードの高いコンポからはじき出される、柔らかな変速音。

木倉さんが急にスピードを上げた。

僕は反射的に木倉さんの向こう、進行方向先に目を向ける。先に急カーブがあったからそれ以上先は見えなかったけれども、見える範囲では傾斜に変化はほとんど見られない。予告していたのと違う。ブラフだったか。

僕は舌打ちして追いかける。今回は遅れることなくしっかりと反応ができた。

変速をし、脚に力を込める。車体はスムーズにそれをスピードに変換していく。

ぐいぐいと上がる速度。けれども、地力が違う。加速力は完全に向こうの方が圧倒的に上。ついさっきまではタイヤが接触しそうなほど接近していたのに、後姿がどんどん遠くになっていく。あつという間に木倉さんはトップスピードにまで持っていく。

十メートル以上の差をつけられ、そのまま道の先にあるコーナーを曲がって、僕の視界から姿を消してしまう。

考えるのは止めた。僕もできる限りの全力を振り絞る。

そうして、僕も同じようにコーナーを曲がり切った時、

目の前の光景に愕然とした。

進行方向にあつたのは、まるで反り返っているよう錯覚するほどのまっすぐに伸びる激坂。そして、その四分の一までをすでに登っている木倉さんの姿だった。

きつと、傾斜の緩いところで蓄えた勢いを利用してあそこまで一気に登ったのだろう。

その勢いはまだ衰えておらず、まるで翼でも生えているみたいに斜面を滑り登る。

まずい、追いつかなくては。

遅れながらも、激坂に突入。

木倉さんほどではないとはいえ、傾斜の緩い場所で加速した勢いそのままに一気に登る。

でも、その勢いもすぐに途切れ、脚にかかる負荷は跳ね上がる。

「<……」

腰を上げ、乗車体勢をシッティングからダンシングに移行。ペダルに体重を乗せる。

でも、踏み込めない。

太腿の内側から何かどす黒いものが膨らんでいくような感覚。僕の動きを著しく制限している。思うようなパフォーマンスができない。

派手な動きをした覚えはないけれども、先頭集団に張り付いてここまで走ってきたことで、脚をかなり消耗していた。

堪らずギアを二段下げ、サドルに腰を下ろす。

そのままではペースを著しく落とすことになってしまう。歯を食いしばり必死にペダルを回し続けた。トルクが出せないなら、回転数で距離を稼ぐしかない。

呼吸が乱れていく。食いしばった歯の間からしゅーしゅーと息が漏れていく。回転を上げれば、その分脚への負担は減る。でも、心肺への負担は逆に高まる。苦しい息の中、激坂の半ばまで走ったところで、前方を見やる。木倉さんはもう激坂を登り終え、さらにスピードを上げて走り出していた。姿が見えなくなっていく。焦りだけが募り、それでも体は思うように動かない。「くっそ……！」

だめだ。間に合わない。

僕の中で、あきらめの信号が灯る。

五. パンチャー

激坂を登り切ると、俺はようやくダンシングをやめ、サドルに腰を下ろした。それでもしばらくはできる限りの力を体中から絞り出し、臨戦速度のまま走り続けた。彼らが激坂区間に手間取っている間に、距離を稼ぐ。この先大きな傾斜の変化はないはずだ。このまま、逃げ切る。

いくつかのカーブを曲がり終えたところで、ようやくペダルを緩める。

どれほど差は開いただろうか。

俺は後ろを振り返った。

蛇行した道の先、幾重もの九十九折の向こうに、かすかに見える影が一つ。そのさらに下方にもう一つの影。どちらが誰の影なのか判別はつかないが、どちらにせよ十分に距離は開いたろう。

とりあえずは、アタックは無事に成功か。

ギアを落とす。ハンドルにもたれかかる。そのままの状態です呼吸を何度もする。乱れた呼吸を、必死に抑え込み、吸って、止めて、吐く、という動作を何度も繰り返す。

ボトルゲージからボトルを取り出し、口の中に水を送り込んだ。二口ほど飲み込むと。今度はボトルを頭の上にやり、ボトルを握り潰すようにして中身をぶちまける。

頭上から降ってくる水の感覚が、一瞬だけ暑さと疲れを忘れさせてくれる。

「ふう……」

ぎりぎりのアタックだった。俺は序盤でかなり脚を使っていた、このアタック直前にも脚を使わされている。そして、そもそも俺は長い登りが得意ではない。アタック前からす

でに脚は限界に近かった。

俺はクライマーなどではない。五キロくらいまでの短い登りなら張り合える自信はあるものの、それ以上となるとピュアクライマーには勝ち目はない。だからこそ、彼らの隙を突くアタックを繰り返さず戦法をとった。

これが俺、木倉剛志の脚質であるパンチャーの戦い方だ。

スプリンターに迫る瞬発力を有しながらもスプリンターほどの筋肉量は求めず、体重の軽さを生かした急激な加速・アタック力を武器とする脚質。体重が軽いゆえに登坂力もあり、登坂中の急加速も鋭い。これがパンチャーの定義。

オールラウンダーのようにも見えかもしれないが、すべてをそつなくこなせるオールラウンダーほどの万能性はない。筋肉の絶対量が足りないから最高速度ではスプリンターに及ばず、同様の理由から平地高速巡航能力もそれほど高くはない。登坂力でもやはりクライマーには及ばない。なんとも中途半端。

もちろん、レベルの高いパンチャーであればスプリントや山岳においても高い成績を残す人もいる。しかし、俺はまだその域に達していない。

だからこそ日々研鑽を重ねているし、レースにも積極的に参加している。チームで参加するレースのほかにもこうした市民レースなどの大会に参加し、実戦経験を積んでいる。実戦でなければ身につかないものもあるのだ。

もつとも、この大観峰ヒルクライム大会に参加したのにはチーム事情も重なっているわけなのだが……。

俺はもう一度後ろを振り返る。後続車の姿は相変わらずの米粒大。完全に独走態勢に入っている。もう加速する必要はない。速度を守って走れば、登坂区間を一位のまま乗り越えられるだろう。

……ため息。

複雑な気分だ。もちろん、アタックが成功して独走態勢に持ってこられたことは嬉しい。しかし、誰も俺のアタックについて来られなかったことへの落胆も半分。

最後までついてきていたあの二人なら、まだ粘ってくれると思ったのだが。

特に、「A-53」——猪部成には、それなりの期待もかけていた。

レース前に久々に会えたあの人の言葉が思い出される。

——この大会、俺の弟も出るんだ。

——ん？ いや、俺と違ってクライマーだけだ。

——うーん、そうだな。登りに限って言えば、速いよ。金峰山、三十分で登り切る。たぶ

ん、チャンピオンクラスに出ても結構上に食い込めるんじゃないかな？

「先輩があれば言うくらいだからもう少しは走れると思っただけだな……」

金峰山は地元の自転車乗りにとっては格好のトレーニングコース。であると同時に、麓から頂上までのタイムはその人の登坂力を示す共通の指標にもなっている。

あの人の弟のタイム、三十分というのはなかなか優秀な部類に入る。高校ロード界では間違いなく山岳エース級。彼がロードに乗り始めて一年も経っていないことを考えると、驚異な成長速度と言える。

そういうわけだ。期待しない方がおかしい。どれほどの走りをするのか。どれほど俺を楽しませてくれるのか。そして、どれほどの可能性を見せてくれるのか。心躍らせた。

しかし、どうにも肩透かしを食らってしまった。やや期待外れ。

確かに先頭集団に最後まで生き残っていたことは評価できるが、それだけだ。特に目立った動きをしたわけでもない。わざわざヒントを出してあげたというのにそれを活用することもできず、俺のアタックにあっさりとは千切られた。なんとあっけない。

いや、そもそも期待したこと自体が間違っていたのかもしれない。いくら金峰山で速かろうと、所詮は自転車歴一年未満の素人。レース経験も圧倒的に乏しいはず。それなのに、優秀な自転車乗りだった先輩の弟と聞いて勝手に期待をかけてしまった。

だいたい、彼の使っている自転車と機材にも問題はあった。

彼が使用しているのは重量の重いクロモリ製のロード。脚に疲れが溜まりにくい利点はあるが、重力に逆らい続ける登坂では間違いなく不利。そして、使用しているホイール。ホイールは自転車の脚。自転車の機材の中では最も費用対効果が高く、ホイールを変えただけでその自転車の走りはがらりと変わると言われる。しかし彼が使っているのは下位グレードのもの。頑丈だから普段乗りにはちょうどいいかもしれないが、レースで勝ちを狙いに行くような代物ではない。

どんなスポーツであれ機材は重要となるが、自転車レースほど機材性能に左右される競技もないだろう。

経験と機材の欠如。

しかし逆に考えれば、その二つさえ揃えば彼はまだまだ速くなるということでもある。相応の環境に身を置きさえすれば――。

俺の所属しているチームに引き入れてみるといいかもしれない。適切な指導や高度な練習も可能になるし、機材面でもメンバー同士でフォローできる。

なにより、チーム青熊は新戦力となりうる若手を欲しているのだ。

今回俺がチャレンジクラスに出たのもそこにある。最低でも登りで俺に食らいついて来るほどの実力を持つ若い人材を見つけ出し、チームに引き入れる。チーム間でのいざこざを起こさないためにも、できればどのチームにも所属していない人物。

猪部成は、実方面ではその条件に達していない。即戦力にはならないだろう。しかし、これからの成長には期待できる。先ほどあげた問題を解消すれば、すぐにでも化ける可能性もある。さすがはあの人の弟だ。

レースが終わったらもう一度声をかけてみるか。
「その前に、さっさとこのレースを終わらせるか」

先の事より、今だ。走りに集中しよう。

俺はペースを幾分落としたまま、ペダルを漕ぎ続けた。

スピードを上げる必要はない。追いつかれる前に登坂区間を登り切れるだけのペースを維持すればそれで十分。今は体力の回復に努める。

もうすぐかぶと岩展望所に到達する。そこで、登り一本調子だったこの登坂コースは終わる。そこからゴールまでの十キロは阿蘇外輪山に沿って走る、アップダウンの続く道。それこそ、パンチャーである自分のもっとも得意とするタイプのコース。そこまで独走に持つていければ、クラス優勝は確実なものと言ってもいいだろう。

そのように安心しきっていた時だった。

——ぎい、ぎい

俺はその微かな音を聞いた。

すぐに振り返る。しかし、歪曲した道の先はよく見えない。あるのは、陽炎に揺らめく路面と、そのわきに広がる牧野。そこを走る人間の姿は見られない。

気のせい？

そう思い直し、ペダリングに集中しようとした時。

——ぎい、ぎい

再びその音を聞いた。

聞き間違いなどではない。それは確かに、俺の後方から聞こえてくるものだった。そう断言できるほど、その音は近くから聞こえたのだ。

それは、ペダルを踏み込むときの音。踏み込むたびに金属のフレームが軋み、発せられる音。

もう一度振り返る。音の正体は、すぐそこにいた。

陽炎の先。ロードを駆り、一心不乱にペダルを漕ぎ続ける一人の姿。

水色のヘルメット。白いサイクルジャージ。真っ黒のレーサーパンツ。

そして、チエレステ空色に塗装された Bianchi のクロモリフレーム。

高校時代、俺を一人前の自転車乗りに鍛え上げた先輩が乗っていたその自転車に、またがる小柄な体。

苦悶に顔をゆがませながらも、まっすぐとこちらを見つめる攻撃的な黒い眼。

「きみは——」

息も絶え絶え。ハンドルを強く握り、脚をシャカリキに踏み込むが、彼の俯かせている顔は苦痛にゆがみ、その背中は呼吸のたびにぶるぶると震えていた。いったいどれほどの力を振り絞って、どれほどの無茶を体に強いてここまで来たのか。

「やっど……やっ、と……」

猪部成の背中が一際大きく膨らんだ。猪部成は、ニコリと白い歯を見せる。

「追い、つい……た」

前言撤回。期待以上だ。

油断があったことは認めよう。スピードを緩めすぎた。そこは反省すべき点だ。しかし、先のアタックで明らかに百メートル以上もの差をつけはずだ。それを、このわずかな時間で埋めてくるとは……。もちろん、それ相応の代償は払っている様子だが。

猪部成はそのぼろぼろの状態からさらに加速し、俺を抜きにかかった。

別にここでの順位争いは無意味。付き合う必要はどこにもない。登坂区間の終点、かぶと岩展望所までは残り一キロを切っていた。たとえ頂上で一位を譲ったところで、そこからゴールまでの起伏コースでは十分勝てる自信がある。猪部成は俺に追いつくために相当消耗しているようであるし、中間ポイント以降で一位を維持することはおそらく無理だろう。

「って、わかってんのにな」

競技者としての性がうづく。

どうにも誰かが前を走っているのが気に入らない。

レースを進めていくための先頭交代ならともかくとして、「後ろから抜かれる」という事実には何とも言えない苦みがある。

「そう簡単に抜かれてたまるかよ」

俺はギアを上げる。

六 クライマーズハイ

激坂を登り終えたときにはすでに木倉さんの姿は豆粒のように小さくなっていった。何重

にも連なる九十九坂の先。さすがにアタックで脚を使ったからか、かなりペースを落とされているように見えたけれども、つけられた距離はほとんど絶望的なものといってよかった。ようやくその姿をとらえたと思ったのに、その背中があまりにも遠い。いったい、あれに追いつくにはどれほどのスピードを絞り出し、維持しなければならぬのか。

よしんば追いついたとしても、脚の消耗は避けられない。最終的に競り負けるのが目に見えている。

ここは賢く、表彰台だけに的を絞って、体力を温存しながら走るのが吉だ。

だいたい、向こうは僕よりもずっとキャリアを積んだ競技者なんだ。チームに所属していて、質の高い練習を続け、多くの大会に出ている。実力は見ての通り。練習の量も質も、レース経験も圧倒的に不足しているぼくなんて、そもそも勝負になるはずがないんだ。

むしろ、半年程度の経験でよくここまでこれたものだと言わなければならない。

年齢制限つきのチャレンジクラスとはいえ、実際のレースで二位を走っている。後半のコースでは大きな順位変動は起こりにくいだろうから、表彰台は確実と言っている。レース歴半年で表彰台だなんて、十分すごい結果じゃないか。

もう辛い思いをしてまでペダルを漕ぐ必要はない。今のペースを維持するだけで、それだけでいい……のに。

どうしてだろう。こんなにも悔しいと思うのは。それに納得できない僕がいるのは。

右の中指で、ブレーキレバーの内側にあるレバーを二回押し込んだ。

かちゃんかちゃんと、チェーンが重いギアへ切り替わる。

脚への負担が大きくなり、でもその分スピードは上がっていく。レースが始まってから

ひたすら回転数を意識し続けていた。ペダリングを、トルク重視の踏み方に換える。

ケイデンス

ああ、何をやっているんだろう。こんな、無意味なこと。全力を賭けたところで追いつける確証なんてありはしないのに。

僕の理性的な部分が冷静につぶやく。でも、もう止められなかった。

登りで、木倉さんを捕まえ、抜く。これは、クライマーとしての僕の意地だった。

僕の両手はハンドルをしっかりとつかみ、上半身に引き付けるようにする。腕ではなく、背中でハンドルを引くイメージ。

脚はひたすらペダルを踏み抜き、引き上げる。

時々ダンシング。サドルから腰を上げ、全身の筋力と体重を推進力へ。

十回ほど踊るとサドルへ腰を下ろし、その状態で十回踏み込む。そして、再び踊る。

一定のリズムを刻むようにして、この動作を何度も繰り返す。

ダンシングで勢いをつけ、シッティングでそれを維持。使う筋肉を変えて負担を分配しながら、突き進む。

少し前から感じていた太腿の内側からの圧迫感は、今ではほとんど痛みが変わっていた。しばしば、脚が痙攣を起こす。

息も辛い。肺の奥の方が焼きつくような感覚。息のたびに燃えカスが胸の奥にたまっていく。あまりの高負荷に気管狭まってしまっている。

トクトクと、ものすごいペースで鼓動が頭の中で鳴り響いている。心拍計はとつくに最大心拍数の一〇〇パーセントを振り切っている。

こんなペース。最後まで持つはずがない。僕はきつと表彰台どころかゴールにすらたどり着けないかもしれない。

暑い。汗が気持ち悪い。のどがひりひりする。

僕は走りながらボトルゲージへ手を伸ばし、ボトルを持ち上げた。

たかだか数百グラムの水しか入っていないボトルが妙に重く感じられる。まるで十キロダンベルでも持ち上げているみたい。これほどまでに消耗しているのか。

僕はそれを口へ運び、一口だけ飲む。

「ふはあ……」

ふと、僕は手の中にあるボトルを見やる。まだ半分程度にしか減っていないボトル。ボトルゲージにはまだあと一本、満タンのボトルが入っている。

念には念を入れて二本持ってきたけれども、結局まるまる一本分は残りそうだ。

せいぜい六〇〇グラム。ボトル自体の重さを含めれば七〇〇くらいか。まだ元気だったときには、そのくらい重くなったって問題ないだろうと思っていたけど、ここまでぎりぎりになってくると、その数百グラムさえも恨めしく思えてくる。持っこのなきやよかった。できることなら、今すぐにも投げ捨てたい気分だ。

……捨てる？

ふと浮かんできた考え。

馬鹿だとは思った。真夏の山道。まだ十キロ以上も道のりを残した状態で無水状態なんて、耐えられるはずがない。でも、それで軽くなれば、もしかしたらまだまだスピードが出るかもしれない。

そうすれば、木倉さんを抜くことだって――。

後先を考えている場合じゃなかった。

僕は手に持っているボトルのふたを開け、中身を道路にぶちまけた。からのボトルをボトルケージに戻し、もう一つの満タンのボトルも手に取る。今度はふたを開けると、そのまま頭の上からかぶる。

頭から、首を伝って、胸へ、背中へ、腹へ。全身が水に覆われる。僕は頭を振り、余分な水を振るい落とした。

これでもう、後戻りはできない。

空になったボトルを元の場所に戻し、僕は再びペダルに力を込めた。水を捨てた効果か、それとも頭からかぶったことで暑さが和らいだからか。いくらかペダルが軽くなったよう

な気がする。

ギアを一つだけ重くし、僕はサドルから腰を上げる。さらにスピードを上げた。もっと、もっと、もっととスピードを。

相変わらず脚は痛い。腰も、背中も、首も、肩も、腕も、もう思うように力が入らない。心肺機能は一〇〇パーセント以上の動きを要求され、今にもはち切れそう。

なのに、どんだん体の奥から力が湧いてくる。

辛いはずなのに、心が湧き立っている。

これ以上はいけないと、体は警報を鳴らしている。ゴールどころの話じゃない。これ以上の加速は確実に体を壊す。

なのに、スピードが乗れば乗るほど、苦痛とは別に僕の中で快感が高まっていく。

ああ、なぜだろう。こんなにも苦しいのに、楽しいのは。

もう歯止めは利かない。

ペダルを踏むたびにぎしぎしと自転車は唸る。

だんだん大きくなる木倉さんの背中。

その差が十メートルを切ったところで、ようやく木倉さんは気がついて僕の方を振り返った。目が合う。

木倉さんは大きく目を見開いた。

「きみは——」

してやったと思った。そうだ。その顔が見たかった。

「やっと……やつ、と……」

何か話そうとするけど、息が思うように続かない。僕はゆっくりと深呼吸して、改めてそれを口にした。

「追い、つい……た」

視界のわきに、登坂区間十四キロ地点のフラッグが見えた。登坂区間は残り一キロ。三キロも僕は全力で漕いできたのか。どうりで今までにないくらいキツイはずだ。

でも、ペダルを緩めるようなことはしなかった。

僕は気を引き締め、さらに脚に力を込め、木倉さんを抜きにかかる。今気を抜いたら、ペダルを緩めたら、たぶんもう二度と加速できないと思った。

「そう簡単に抜かれてたまるかよ」

当然、木倉さんはそれを許さない。

僕が木倉さんの横に並ぶのを見るや否や、持ち前の加速力で僕を引き離しにかかる。レース序盤で見せたような美しいフォームのものではなく、力任せにがんがん踏んでいくダシニングだった。歯を食いしぼり、まさにもがくようなペダリング。

でも、やっぱり速い。

手の届く範囲にまで知事まっていた木倉さんとの差は、次の瞬間には数メートルにまで広がる。

でも、僕も負けてられない。ペダルをひたすら回し、じわじわと追いついていく。追いついては離れ、離れては追いつく。

詰める、逃れる、詰める。

体の疲労はとっくの昔にピークを越え、もしかしたら一周してしまったのかもしれない。今では逆に何も感じなくなってきた。

そのかわり、脚先が少し寒く感じ、頭の中心の方がぼうつとした感覚になってきた。視界が狭まって、僕の周りから景色が消える。音が消える。目に映るのは、木倉さんと、数百メートル先にあるはずの中間ポイントへ続く道だけ。聞こえるのは、自分の呼吸と鼓動の音だけ。

ようやく、木倉さんの背中の方の向こうに、中間ポイントが見え始めた。

まっすぐと伸びる坂道の先。

瞬間、僕の中ですべてが消える。木倉さんの姿も消える。何も分からない。真っ暗。その黒の中に、中間ポイントだけが光って見える。

——速く。もっと速く。

麻痺した頭の中で響く声。

——誰よりも速く。あの頂へ。

力が、わいてくる。

もつとも前へと、気持ちがる。

まぶたを閉じる。歯を食いしぼる。

ドロップハンドルの下ハンを握りしめ、腰を上げ、前のめりになるような姿勢。

踏む。踏む。とにかく踏む。全身のばねを総動員し、踏み込む。

くらい視界の中、僕がひたすらにペダルを踏み切った。

終 中間ポイント・かぶと岩展望所

ふと、ペダルが急に軽くなる。

続いて、かたんと、地面からの小さな衝撃。小さな段差——たぶん、計測ポイントのセンサーを通過したからだろう。それで、僕はくらい視界の中自分が登坂区間を登り終えたことを知った。

「げほっ」

いつの間にか止めていた呼吸を一気に吐き出した。

登坂への集中が切れた瞬間、僕の体に大きな重圧がかかる。僕はペダルを止め、そのままハンドルにもたれかかった。もう、一ミリも体が動かない。

『チャレンジAクラス、中間ポイント一位通過……』

間もなく、アナウンスが聞こえた。

ああ、そうだ。結果はどうなったのだろう。僕と木倉さん、どっちが中間ポイントを取ったのだろう。僕は耳を澄まし、その続きを聞いた。

『……選手番号「A-53」、猪部成選手』

歓声と拍手が上がる。

ああ、そうか。木倉さんは抜けたのか。

小さな満足感。全力を出した甲斐があった。登りで、勝てたんだ。俯きながらおもわずにやりと笑ってしまった。

中間ポイントを通りすぎると、緩やかな下り坂になっていた。僕はもうペダルを漕ぐことすらできず、重力に従ってゆっくりとその坂を下った。

頭がくらくらして、気持ちが悪い。両脚ともにびくびくと痙攣を起こしている。突っ張ったような感覚がして、少しでも動かすと攣りそう。息も上手くできなくて、呼吸をするたびにぜひぜひと嫌な音が鳴る。上手く空気が吸えない。気管の奥が何だかむず痒い。大口開けて空気をむさぼるけれども、そのせいでのどがすぐに乾いてしまう。乾きすぎて、口の中がねちよねちよする。気持ち悪い。

僕はボトルに手を伸ばそうとして、すぐに断念。そうだ。もう水はないんだ。

だらりと右手をぶら下げる。

「水、切れたの？」

すぐ横からそんな声をかけられた。木倉さんの声だった。首は上がらないから、目だけでそちらの方を見してみる。僕の横を並走しながら、木倉さんがボトルを僕に差し出していた。

「いいん、ですか？」

「もちろん」

僕はそれを受け取り、すぐに口へ運んだ。口の中に広がっていた砂漠が一瞬で潤う。口からのどへ、腹へ。液体の通過する感覚はわずかながらに僕の体力を回復させてくれた。ようやく上体を起こす。

「ありがとうございました」

僕はボトルを木倉さんの方へ返す。

木倉さんはそれを受け取って、自分の自転車のボトルゲージに仕舞い込んだ。それから、

ニコリと僕に笑いかける。

「お疲れ。すごい走りだったね。完敗だよ。特に最後の追い上げと加速。あれはすごかった。まんまと中間一位取られたよ」

「それは……どうも」

「でも、ここからはもう負けないよ。悪いけど、優勝は俺がもらう」

僕は顔を上げてコースを見渡した。遠くの方に大観峰が見える。そして、そこへ向かう、外輪山に沿って通る道も。

長い。確か、かぶと岩展望所から道なりに十キロだったか。……あと十キロも僕の体は持つだろうか。こんな状態で。

「それじゃ、ゴールで会おう」

そう言つて、木倉さんは自転車を加速させた。まるで水を得た魚のようだ。颯爽と下り坂を駆け抜けていく。

もちろん、僕にそれを追う力なんてあるわけなかった。脚は動かないし、息も満足にできない。こうして上体を起こし維持するのだけでやつと。

ああ、やっぱりレベルが違うや。

あれだけの競り合いをしたのに、結局木倉さんは最後まで力を温存していたんだ。これが、熟練の競技者と素人との差か。

どんどん小さくなる木倉さんの姿。木倉さんはあつという間に下り終え、そのままの勢いで登りを一気に駆け上がって行く。

かなわないなあ……。

でも、まあ。

レースでは負けただけど、登りでは勝てたんだ。今は、それだけで満足だ。

いざれ追いつく。追い抜く。次、レースで会う時は、必ず。

僕は思いつきり息を吐いた。ぎりぎりまで。腹に目いっぱい力を込め、肺に溜まった空気を根こそぎ絞り出す。その状態から力を抜く。自然と新鮮な空気が一肺を満たす。そうした呼吸を何度もして、呼吸を整える。

もうすぐ長い下り坂が終わる。

両手で震える脚をパチンとたたいた。

さて、もうひと頑張り。もう少しだけ我慢。

ゴールだけはしなければ。そうしないと、ここまで走った意味がない。

坂を下り終えた。目の前にそびえる数百メートルにわたる上り坂。

ギアを一番軽くする。

僕はサドルから腰を上げ、ペダルを踏み込む。